II. 遺跡調査の概要

北丹波（きたたんば）・東流（ひがしながれ）遺跡（本発掘調査B）

所在地　稲沢市下津丹下町・下津森町・下津下町西一～三丁目
（北緯35度15分6秒 東経136度49分39秒）

調査理由　街路改良工事(都) 名古屋岐阜線

調査期間　平成30年6月～平成30年8月

調査面積　630㎡

担当者　酒井俊彦・永井宏幸



調査地点（1/2.5万「一宮」）

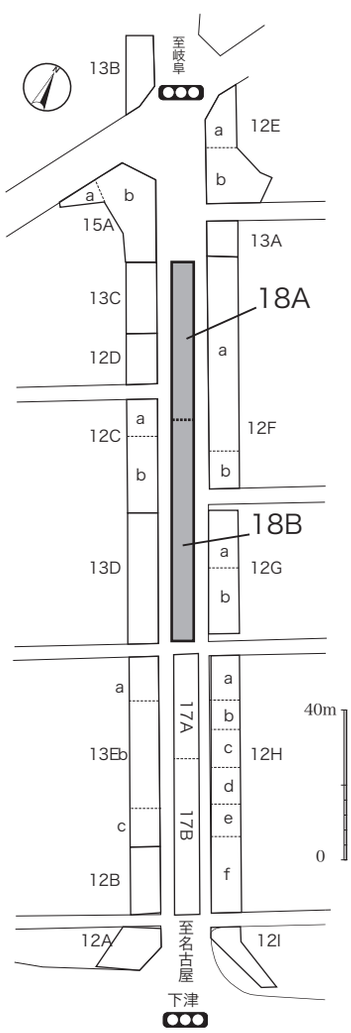
調査の経過　県道名古屋岐阜線の街路改良工事事業にともなう事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受け、発掘調査を実施した。調査は、平成24年度に2,320㎡、平成25年度に1,000㎡、平成27年度に390㎡、平成29年度に490㎡おこなった。今年度の調査区は現道部分を対象とし、平成29年度調査区の北側を調査した。

調査の概要　遺跡は、遺跡の北東側にある青木川右岸に広がる自然堤防およびその後背湿地に立地する。標高は現況４～５ｍ前後である。

調査の結果、昨年度に引き続き、古墳時代前期、飛鳥時代から奈良時代初頭を中心とした古代前半期、鎌倉～室町時代を中心とした中世、以上大きく３つの時期を中心に遺構が展開していた。遺構は概ね18A区北寄りと18B区南寄りに集中していた。この間には中世以降の流路と近代以降の水田が展開し、中世以前の遺構を削平していた。

古墳前期　古墳時代前期の遺構は18A区北寄り中央を縦断する大溝112SDとこれに合流する小溝115SD、18B区南寄りに小区画水田などを確認した。遺物は廻間Ⅲ式期を中心とするS字甕や壺、器台などが出土している。

大溝112SDは規模と位置、出土遺物から遺跡の北東部にあたる12Eb003SDと同一遺構である可能性が高い。また、この大溝112SDの東側に溝114SDを確認した。調査区外に広がるため規模や方向は確定できないが、位置関係から12Eb003SDに東接する12Eb005SDと同一遺構である可能性があり、溝114SD→大溝114SDの順に掘削された水田に関連する基幹水路と推定できる。今回の調査対象地は水田と畑地が広がると調査前に想定していたが、水田を検出した地点は18B区の南端部のみであった。水田を面として確認できたのは今回が初めてである。この南端部付近の５㎡前後に４区画の水田を検出した。



調査区位置図

調査区位置図（S=1/2000）

南北方向に幅50㎝前後の畦畔が調査区中央を縦断し、東西および南端の調査区壁を取り囲むように畦畔状の高まりが検出された。これら水田の上位には東西方向の溝081SDが横断する。水田関連にともなう水路と思われる。

古　　代　古代の遺構は、18A区が溝群、18B区南端が竪穴建物群を中心に確認した。

18A区の溝群は南北方向に２条（107SD・104SD）、東西方向に１条（106SD）確認した。いずれも８世紀前葉を中心とする須恵器・土師器が出土している。107SDは断面が逆台形、幅2m前後、深さ0.5m前後を測る正方位からやや西に傾く南北溝である。溝の北端に109SDが接続し、西方へ1mほど屈折する。南端は緩やかに西方へ屈曲し、調査区外へ伸びる。104SDは断面が逆台形、幅1.5m前後、深さ0.35m前後を測り、南北方向の正方位上に伸び、ちょうど東および西調査区壁辺りでクランク状に屈曲する溝である。いずれの溝も両脇に位置する既年度調査区に同一遺構と推定できる溝がない。注目すべき遺物として、これら２つの溝から各１点、「美濃」施印須恵器が出土している。今年度の類例を含めて、都合６点となった。

18B区南端の遺構は、２面に渡って確認した。上位は８世紀前葉を中心とする竪穴建物５棟、下位は７世紀前半を中心とする竪穴建物４棟を検出した。いずれも全体が把握できる建物はなく、柱穴を確認できた建物も少ない。これらのうち上位と下位に各１棟、造付カマドを伴う竪穴建物が想定できた。

中　　世　中世の遺構は、18A区北半分と18B区南端で井戸と溝を中心に確認した。いずれも13世紀前後を中心とする遺物が伴っている。

大溝091SDは、南北方向に延びる溝で、断面が逆台形、幅２m前後、深さ0.5m前後を測る。規模と方向から、12Fa002SDと同一遺構の可能性がある。この大溝091SDは中世遺構群の基軸となる溝と考えられる。091SDの北側に井戸２基と幅0.5m前後の小溝４条を確認した。18A区北端近くに展開する井戸111SEと小溝085SD、086SDなどは091SDの方向に平行あるいは直行する配置となる。大溝091SDに近い井戸102SEと溝088SDは平安時代末頃の遺構で、本遺跡では数少ない時期の遺構である。

18B区南端近くの遺構は井戸が２基（051SE・058SE）、溝が１条（008SD）、柱穴と推定できる小穴を含む多数のピットを確認した。051SEの上位は008SDが東西方向に延びる。井戸の上位に溝が配置された組み合わせは12C区、12D区などでも確認されている。051SEは試掘坑で一部欠損しているが、ほぼ全形が把握できる井戸であった。3m四方の平面形、やや南寄りに円形の基底面があり、そこから漏斗状に立ち上がる断面形となり、深度は1.5m前後を測る。曲物など下部構造はなく、上位層と中位層にブロック混じりの斑土層が認められ、廃棄後人為的に埋めた可能性がある。尾張型第5・６型式の椀・小皿をはじめ、中国産青磁皿片が出土した。特筆遺物に方形の陶硯がある。調査区南端の井戸058SEは調査区南西隅がちょうど井戸の基底部に相当する。深度は1m以上を測り、上部の平面形は１辺3m以上を測る方形であろう。

ま と め　5次にわたる調査成果から「美濃」施印須恵器についてふれておく。

「美濃」施印須恵器が６点出土した。これまでの成果から、窯業遺跡以外からまとまって出土する遺跡は、平城宮跡の５点、各務原市広畑野口遺跡の10点のみで、２番目に多い類例となった。また、尾張国府周辺に位置する船橋市場遺跡の２点は「美濃国」施印と刻書である。「国」の有無が時期差を示すと指摘されているので国府造営の変遷を考える上で興味

深い。なお、尾張大國霊神社周辺は国府の推定地として有力であるが、この近辺における同時期の遺構から「美濃」施印須恵器の出土例はない。「美濃」施印須恵器のみで国府造営は推定できないが、８世紀前葉に限定できる須恵器として紀年名と比肩されることと、716（霊亀２）年に美濃国司笠朝臣麻呂が尾張国司を兼任する時に重なることは、考古資料と文献史料の両側面から検討できる稀有な歴史的事象である。　（永井宏幸）



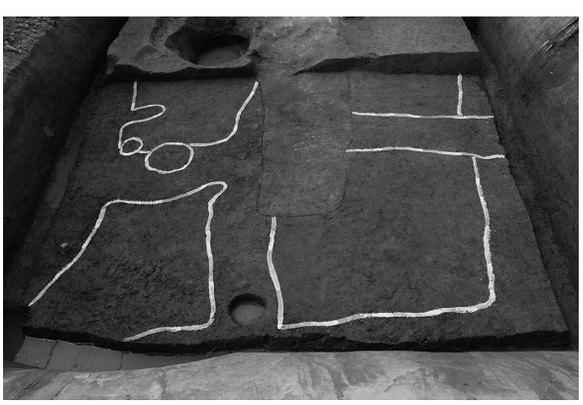
古墳前期112SD完掘北から



古墳前期112SD断面トレンチ7北から



古墳前期115SD遺物出土南から



古墳前期18B区水田検出南から



古墳前期18B区水田完掘南から



古代18A区107SD北から



古代18A区104SD北から

古代「美濃」施印須恵器



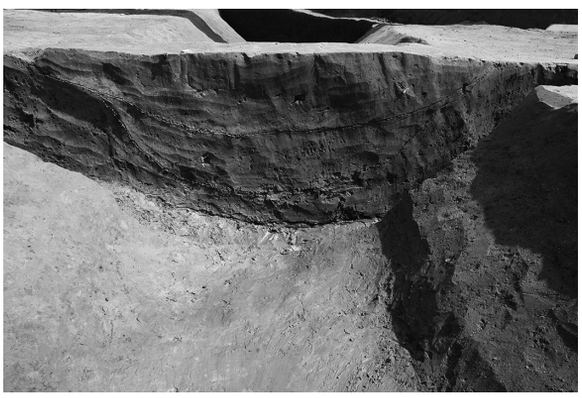
107SD出土



104SD出土



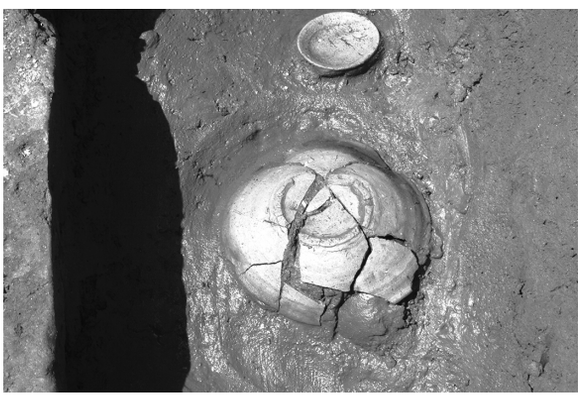
中世18A区全景北から



中世091SD断面南西から



中世091SD完掘西から



中世091SD山茶碗出土南から

いっしきあおかい 一色青海遺跡（本発掘調査B）

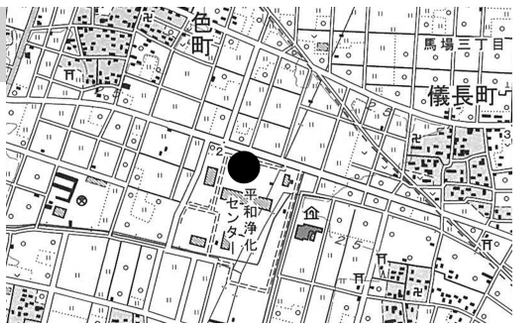
所在地　稲沢市一色青海町、儀長一丁目地内
（北緯35度14分10秒 東経136度45分22秒）

調査理由　日光川上流流域下水道

調査期間　平成30年6月～平成30年11月

調査面積　1,300㎡

担当者　酒井俊彦・鈴木恵介



調査地点（1/2.5万「清洲」）

調査の経過　調査は愛知県建設部下水道課一宮建設事務所による日光川上流流域下水道事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成30年6月から平成30年11月にかけて実施した。調査対象地の現況は埋め立てられた旧耕作地であり、近代の耕作土および床土を除去した１面目として平安時代～江戸時代までの遺構を扱い、１面目の遺構除去後、方形周溝墓と方形周溝墓墳丘覆土直下に検出される弥生時代中期後半の遺構を２面目として扱っている。調査面積は1,300㎡である。

立地と環境　一色青海遺跡は三宅川と日光川に挟まれた沖積低地の旧河道自然堤防上に位置している。現代の地表面の標高は東より西に向かってわずかに降るが、遺構検出面の傾斜も東から西に降る同様の状況である。過去の調査成果より、一色青海遺跡では北西から南東に流れる旧河道が大型掘立柱建物が検出されている集落中心部分で北東に向きを転じる状況が検出されている。今回の調査区は集落中心部の北東に位置し、南西から北東に流れる旧河道が調査区西半分を占め、東半分には旧河道の自然堤防が位置する。東半部では方形周溝墓によって構成される墓域、竪穴建物跡によって構成される居住域が検出された。遺構検出面の標高は東側の方形周溝墓・竪穴建物跡付近で0.7m～1.0m。西側の旧河道付近では0.3～0.5mである。遺構検出面の標高は、本調査区に隣接する南側の2009年度調査区では約1mとわずかに高いが、旧河道の流路が南から北に向かっていることで全体の標高が南から北にも降っていることや、後世の耕地整理によって削平される部分が大きかったことも影響していると考えられる。

調査の概要　今年度の調査区には、2009年度調査区北東部で確認された土取り目的と考えられる撹乱も南西部に存在する。

調査は平成30年7月に着手した。7月の降雨の多さと8月の記録的猛暑により調査の進捗は前半においては遅く、１面目の遺構掘削が完了したのは8月下旬であった。１面目の完了後、2面目の遺構として、方形周溝墓010SZ・020SZ、大溝200SDを掘削し、方形周溝墓の墳丘下で検出された竪穴建物跡や大溝200SDの下層に当たる旧河道400SDの全ての掘削が完了したのは11月中旬であった。

一面の遺構（中近世）　１面目の遺構は、表土直下で検出された大小の土坑、方形土坑、溝175SD等がある。１面目の土坑は全体的に浅く遺物の出土も少量にとどまる。

230SK（大型の方形土坑）

長軸4.17m、短軸2.23mを測る平面形方形の土坑。出土遺物には土器や木片少量があるが、これらは230SKが掘削された際に200SD上層を削平していることから入ったものと考えられる。直接的に時期を示す陶器などは見られないものの、200SDに後続する切り合

い関係や、埋土は他の灰釉陶器や山茶碗が検出された、より小型の方形土坑に類似することから遺構の年代は中世以降と想定される。

溝（175SD、185SD）

175SDは残存長23.8m、最大幅2.6m、遺構検出面からの深さ0.2～1.1mを測る溝状の遺構で、全体が一定の深さでは掘削されておらず、延長4m～6m、幅2m、遺構検出面からの深さ1.1mの深い部分を繋いだような平面形状をしている。175SD北半部ではこの繋ぎ目に当たる部分は検出できておらず、方形周溝墓の周溝021SDとの重複部分では、021SDの堆積を175SDとして掘削した可能性がある。175SDは部分的に方形周溝墓010SZ、020SZの周溝よりも深く、2面目完掘時においても一部が残存する。

185SDは175SD中央付近で接続する溝状の遺構で、175SDで深く掘削された部分が連結した形状を示す。北を上にして見た場合、175SDと185SDの平面形状は「ト」を左右反転させた状態となる。185SDも現状の検出面上では南西方向へは連続しない。

175SD、185SDの用途については、南半部で浅く接続される部分も検出されるため、水溜め機能を併せた導水施設などが考えられる。

2面の遺構（弥生時代中期後半）

２面目の遺構として、弥生時代中期の遺構は方形周溝墓とその周溝（010SZ、020SZ、001SD、002SD、007SD、021SD）、竪穴建物跡（274SI、279SI、280SI、302SI、306SI、308SI、310SI、326SI、329SK、330SI）、土坑（100SK、285SK）等がある。

方形周溝墓

方形周溝墓（010SZ）

検出面がほぼ墳丘基底部であり、埋葬施設は残存していなかった。検出時の墳丘規模は東西11.86m（残存長）、南北12.05mを測る。主な出土遺物は、周溝より出土しており、後述する周溝西側中央部で甕3点、細頸壺2点がまとまって出土しているが、周溝内埋葬等の可能性は低く、墳丘上から転落した可能性が考えられる。また、墳丘の検出中にも墳丘埋土より遺物が出土しているが、後述の竪穴建物跡が墳丘直下より検出されていることから、竪穴建物跡の遺物が包含されたものと考えられる。

010SZ周溝（001SD・002SD）

010SZを巡る周溝。連続すると想定される遺構であるが、南東隅部分のみ調査区境によって分離するため別の遺構番号を付した。幅は2.3m～2.5mで、検出面からの深さは0.7～0.8mを測る。上層を175SDによって削平されているものの、010SZ南西部分付近でやや浅くなる箇所が確認されており、陸橋が存在した可能性がある。

方形周溝墓（020SZ）

残存状況は010SZと同様で、埋葬施設は残存していない。東西6.54m、南北7.63mを測る。主な出土遺物は周溝より出土し、東側の周溝中からは完形の細頸壺が出土した。

020SZ周溝（021SD）

020SZを巡る周溝。最大幅1.77mを測り、検出面からの深さは0.65mを測る。010SZ周溝と同じく、021SDも西側は175SDと重複し、削平を受けている。021SDにおいても020SD南西部付近にやや浅くなっている部分が存在するが、175SDの削平を強く受けているため、陸橋部としての明瞭な痕跡は残していない。

007SD

調査区北東部で検出された周溝。020SZ北側に隣接する、過去の調査においても未検出の方形周溝墓の南側周溝と考えられる。出土遺物には土器、磨製石斧、木片がある。本調

査区では020SZと切り合う箇所も無いため、前後関係は不明。

竪穴建物跡　竪穴建物跡の検出状況は、北側の020SZの墳丘盛り土下から周溝021SD西側にかけて、274SI・326SI・310SI・279SI・280SK（280SKはおそらく液状化現象等の理由によって形状が不明瞭だが、竪穴建物跡に加える）計5棟が検出された北側竪穴建物群と010SZの墳丘下で330SI、302SI、308SIの計3棟が検出された南側竪穴建物群が主なもので、200SD東沿いに２箇所竪穴建物跡の一部と考えられるものが検出されるが、南側のかく乱によって大きく欠損しているため、重複した状況は確認できない。

北側竪穴建物群は020SZの西側に位置する。各々の一部を020SZの周溝021SD、および中近世の溝175SDによって欠損する。前後関係の新しい順に、274SIは東西3.21m、南北4.53mで南北に長軸をもつ。326SIは東西4.69m、南北3.26mの東西方向に長軸をもつ。310SIは東西6.08m、南北3.81mで東西方向に長軸をもつ。279SIは東西不明。南北5.54mでおそらく南北方向に長軸を持つ。280SKは平面形状が不明瞭で規模不明。

南側竪穴建物群は010SZの墳丘下で検出された。それぞれの竪穴建物跡は残存状況は浅く、本来の深さよりも削平を受けており、方形周溝墓の検出時には確認できないことから、方形周溝墓の構築等に伴って竪穴建物跡が削平を受けたか、竪穴建物跡の廃絶時に多くの土砂で周囲と一様に埋没した可能性がある。前後関係の新しい順に330SIは東西4.24m、南北7.17mで南北方向に長軸をもつ。302SIは本調査区最大の竪穴建物跡で、いわゆる火災（焼失）住居。東西8.55m、南北7.92mを測る。南西側柱穴には炭化した柱材が残存する。

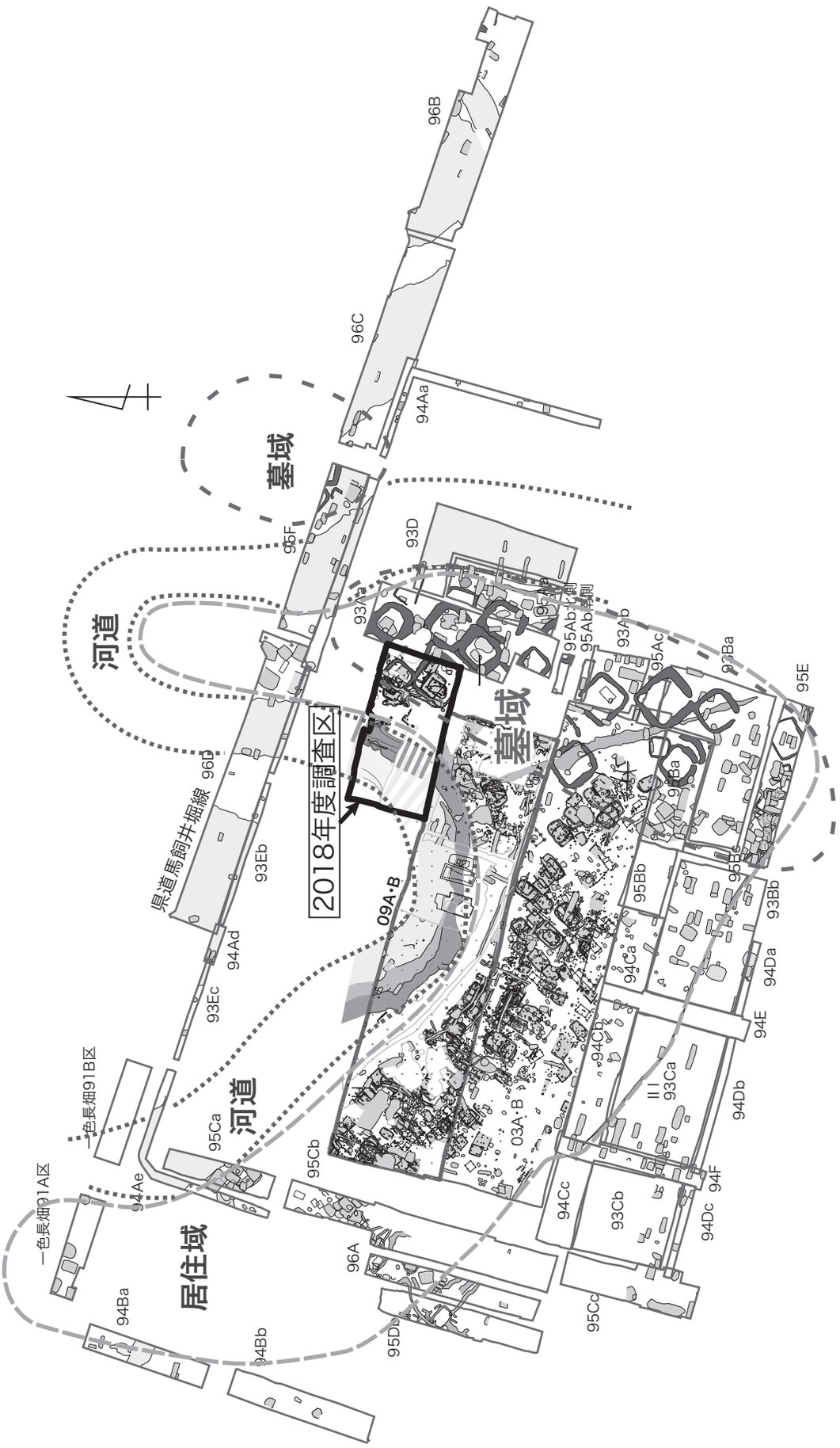
308SIは東西4.78m、南北2.85mを測る。北半部は液状化現象等の影響で平面形状が不明瞭となっていた。

ま　と　め　これまでの発掘調査成果によって想定された一色青海遺跡の全体像と照らし合わせると、18区の調査区内での結果については、事前に河道、居住域、墓域がそれぞれ想定されていたが、河道は想定どおりの位置で検出された。居住域は河道間際まで展開することによって想定より西側に向かって拡大。墓域は河道からやや距離をおいて位置することが判明、東側に縮小した。居住域・墓域の存在する自然堤防は西や南西から流下する河道・溝（400NR・200SD）を北向きに変えている。09調査区で検出された200SDに先行する大溝600SDは調査区南半部分の撹乱にも影響を受け、本調査区では平面で検出できていない。断面観察では200SDが複数回の再掘削を受けていることが判明し、この中の下層が600SDに相当すると考えられる。当初は600SDが200SDより東よりに流下する想定だったが、前述の自然堤防によって向きを変え、200SDと重複している可能性が高くなった。

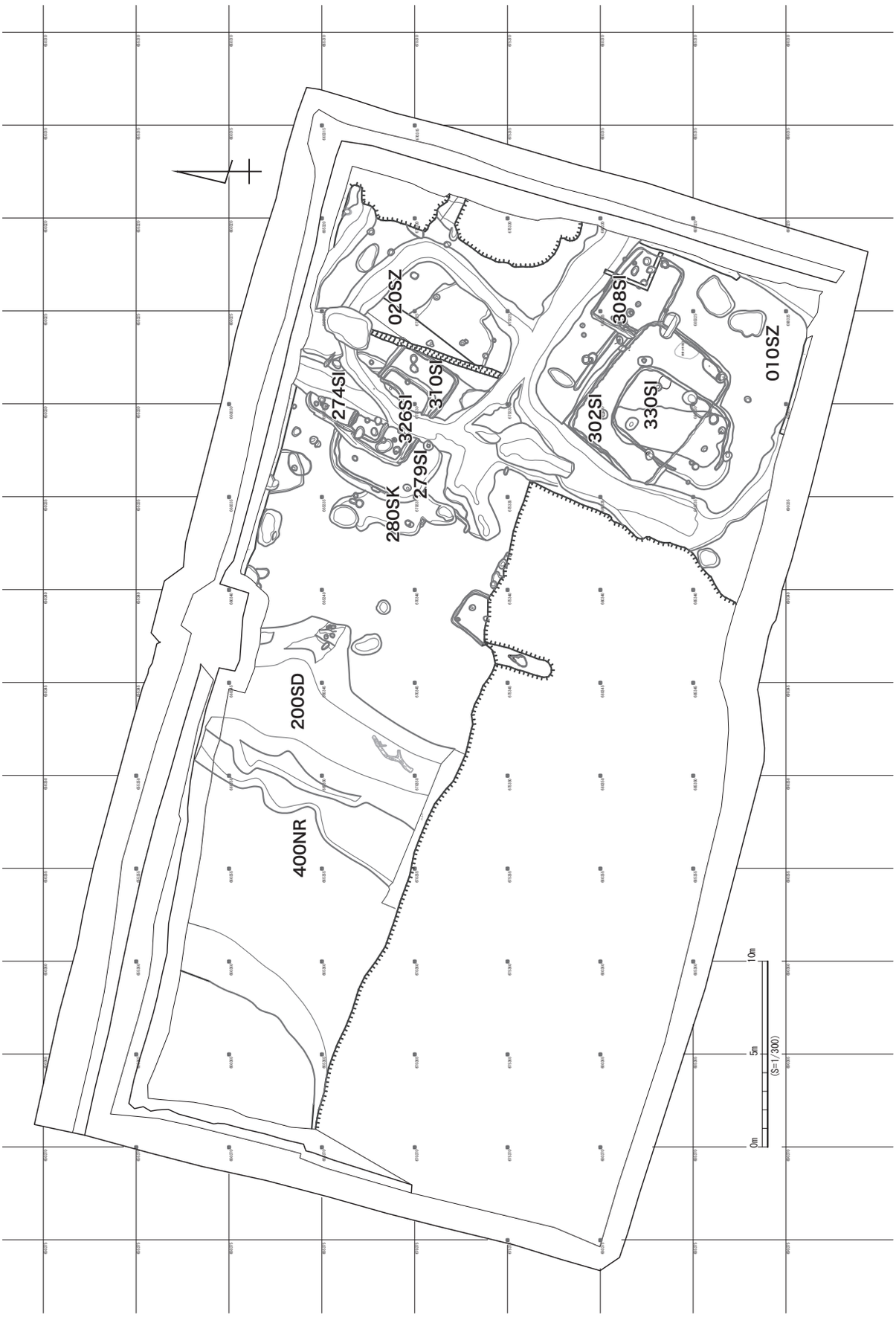
弥生時代の遺構の変遷は、これまでの調査成果によって指摘されている通り、中期後葉の高蔵式期に限定される。遺構として重複していた方形周溝墓の周溝（弥生時代遺構として最新）と竪穴建物群の出土土器に明確な時期差が判別できないため、本調査区内に限っても、北側の竪穴建物群の最大五回にわたる建替と、その後の方形周溝墓の構築にいたるまでが、計百数十年間のうちに行われ、そこで集落が廃絶したと考えられる。

過去の調査においては中世の遺構も多数が検出されているが、本調査区では中世の遺構の残存状態が特に悪く、これは近世以降の耕作地としての掘削が深く及んだためと考えられる。

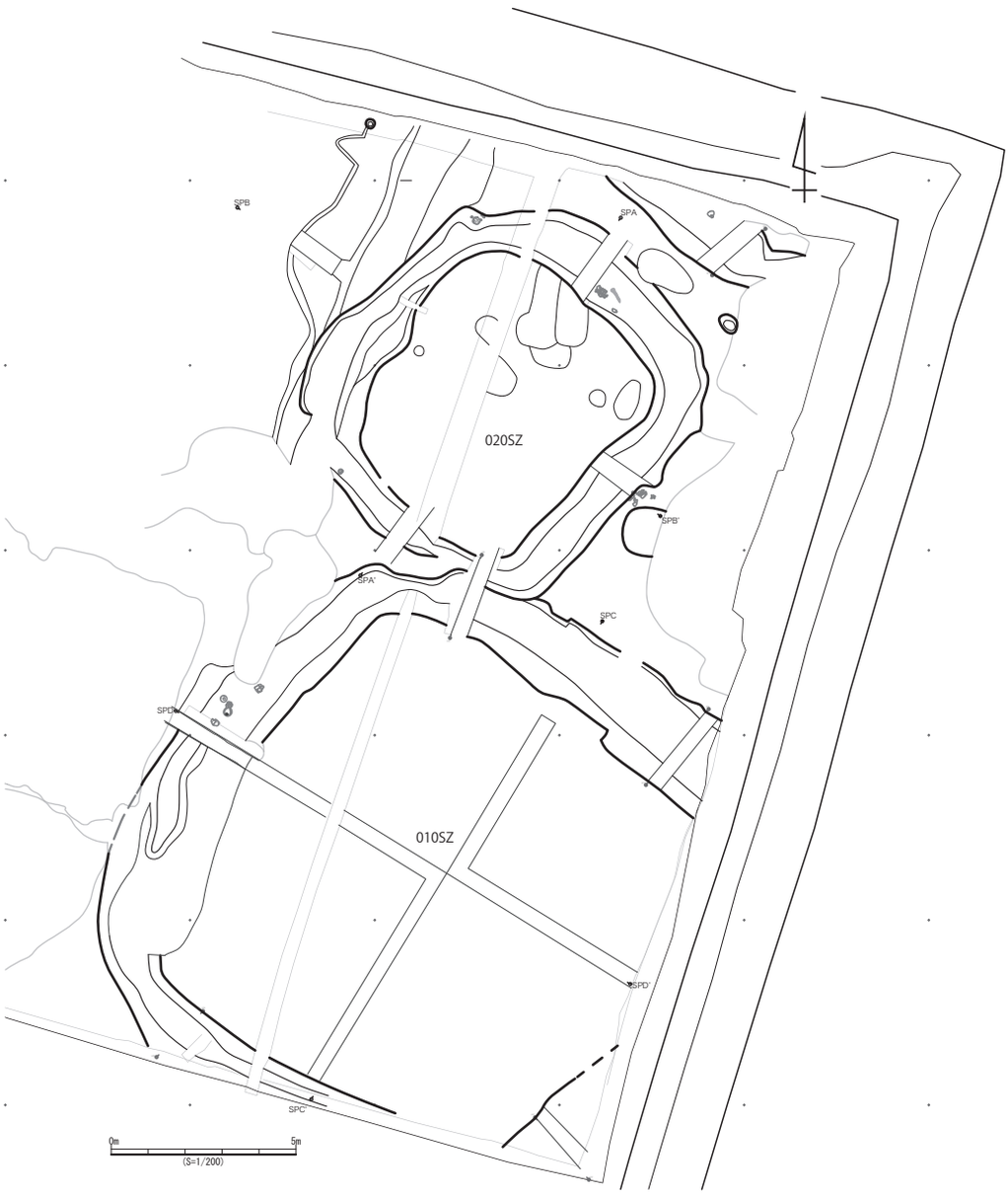
（鈴木恵介）



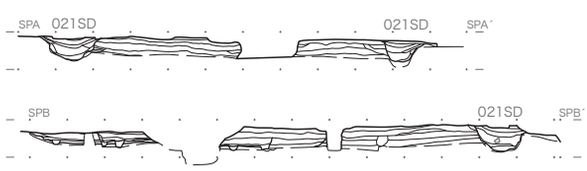
一色青海遺跡集落模式図（弥生時代中期後葉　S=1/2000）



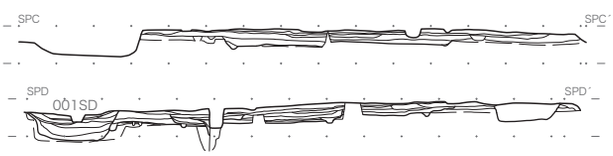
一色青海遺跡18区2面遺構全体図（S=1/300）



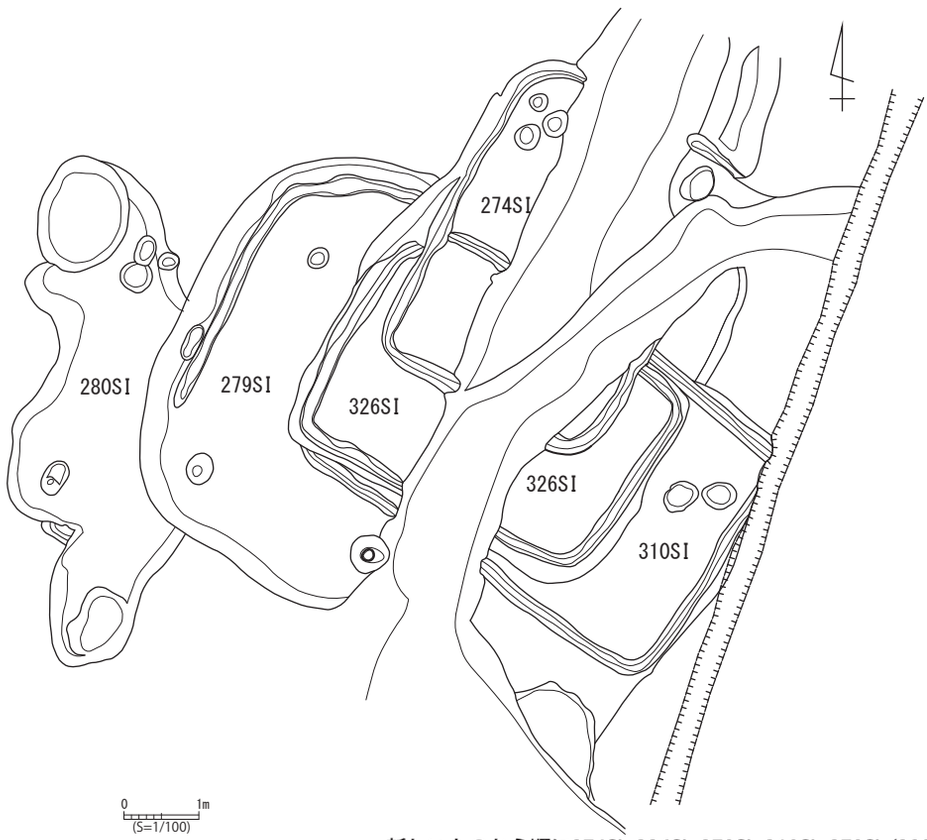
一色青海遺跡18区 方形周溝墓010SZ・020SZ平面図（S=1/200）



一色青海遺跡18区 方形周溝墓020SZ断面図（S=1/200）

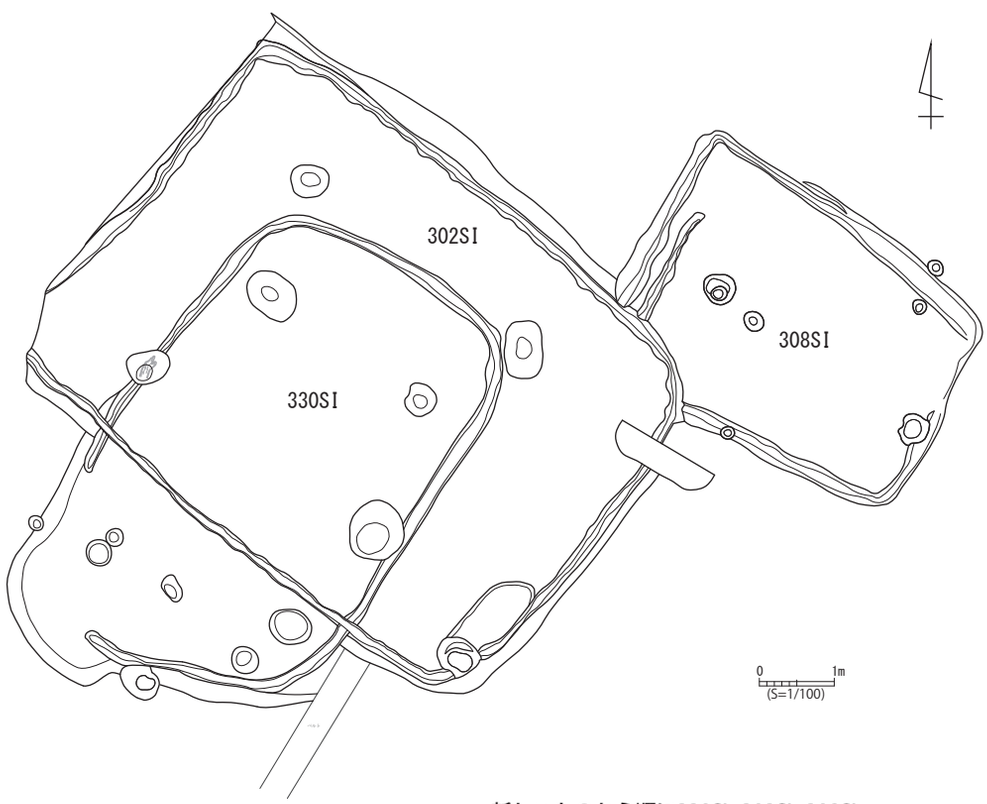


一色青海遺跡18区 方形周溝墓010SZ・断面図（S=1/200）



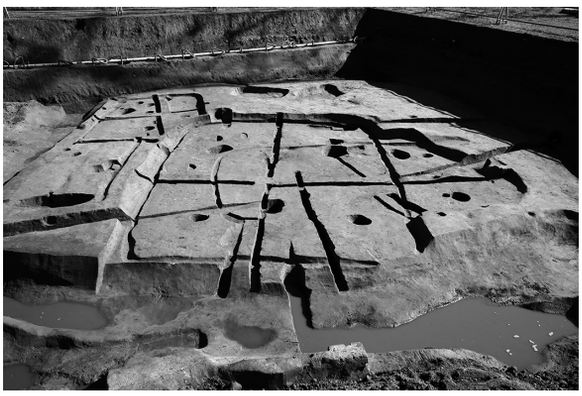
新しいものから順に274SI・326SI・279SI・310SI・279SI・(280SK)

一色青海遺跡18区 竪穴建物跡274SI・326SI・279SI・310SI・279SI・280SI平面図（S=1/100）



新しいものから順に330SI・302SI・308SI

一色青海遺跡18区 竪穴建物跡330SI・302SI・308SI平面図（S=1/100）



竪穴建物跡330SI・302SI・308SI



竪穴建物跡274SI・326SI・279SI・310SI・279SI



竪穴建物跡302SI出土土器群（焼失時に据えられた状態）



方形周溝墓完掘状況（手前020SZ、奥010SZ）



方形周溝墓010SZ周溝001SD出土　土器



方形周溝墓020SZ周溝021SD出土　細頸壺



溝200SD完掘状況



溝200SD出土容器未製品

清洲城下町遺跡（本発掘調査B）

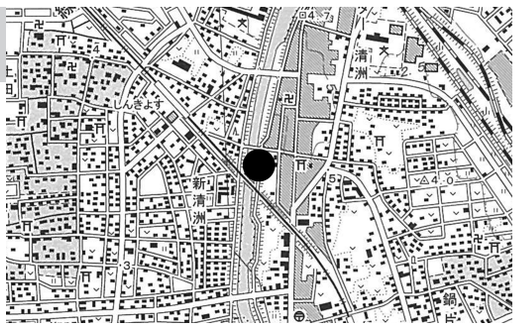
所在地　清須市清洲地内
（北緯35度12分36秒　東経136度50分19秒）

調査理由　総合治水対策特定河川事業船杁橋施工

調査期間　平成30年6月～平成30年10月

調査面積　1,280㎡

担当者　酒井俊彦・蔭山誠一

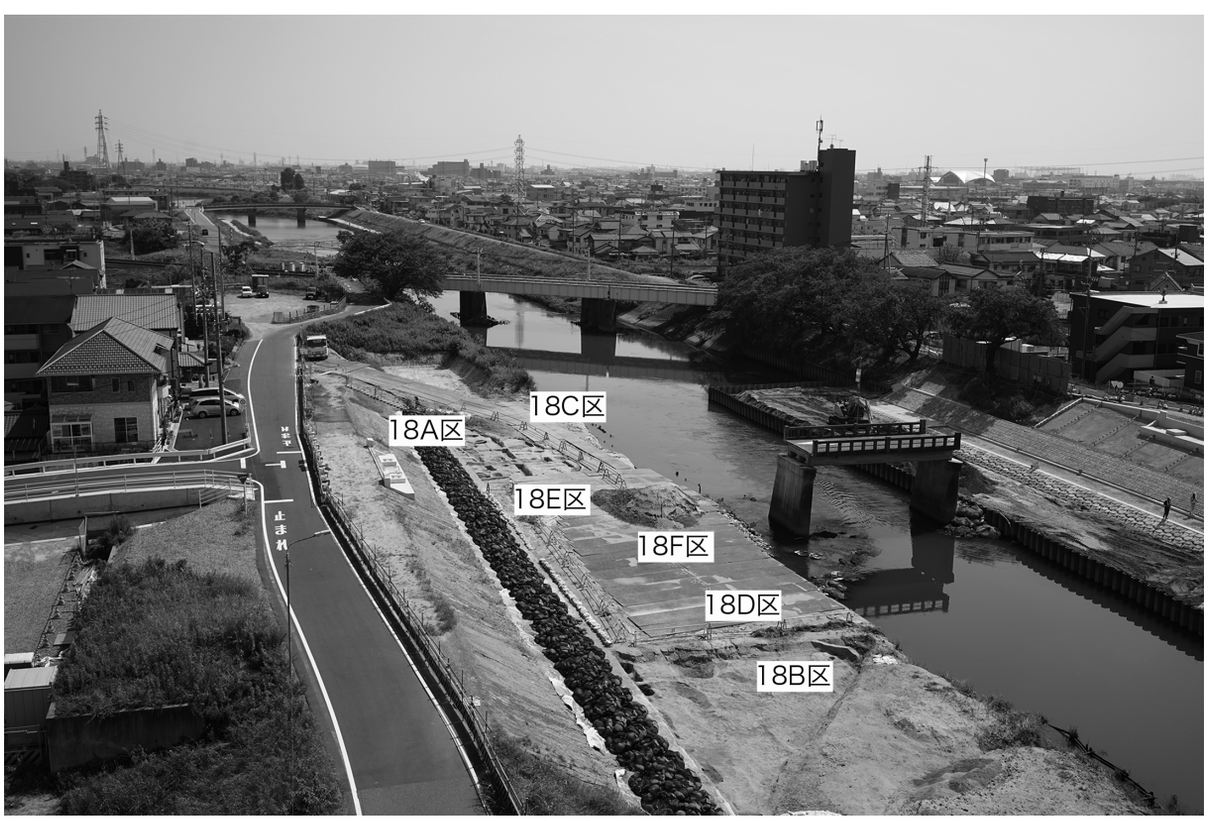


調査地点（1/2.5万「清洲」）

調査の経過　今年度の調査は、平成29年度から続く五条川に関わる総合治水対策特定河川事業船杁橋施工事業にともなう事前調査として、愛知県建設部河川課尾張建設事務所より愛知県教育委員会を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受け、平成30年6月～10月に調査を実施した。調査区は五条川河川敷の左岸で名鉄名古屋本線北側にあり、船杁橋橋脚の南北の範囲（1,280㎡）で、北から18B区、18D区、18F区、18E区、18A区、18C区として調査した。

立地と環境　清洲城下町遺跡は五条川中流域に形成された自然堤防と後背湿地上に立地する古代から近世にかけての複合遺跡である。遺跡の中央には、名古屋方面の南南東から北北西にのびる美濃街道がはしっており、美濃街道と五条川が交差する北側に清洲城の本丸が想定されている。

調査の概要　今回の調査では、戦国時代から江戸時代にかけての主に2時期の遺構と出土遺物が確認できた。



調査区遠景（北東より）



清洲城下町遺跡18区遺構平面図（S=1/400）

（１）戦国時代～江戸時代前期

井戸7基、溝35条、土坑40基、自然流路1条を確認することができた。検出された遺構は、複数で重複しており、一時期に存在する遺構数は少ない。

井戸（SE）は調査した範囲の東側に沿って南北に並んでみられ、18A区と18C区にみられる4基の井戸は、7mから10mの間隔で確認された。井戸の構造物は結桶が確認されるものがあり、18A区035SEと18F区083SEでは、結桶の木材が残っていた。

溝（SD）は、南北方向がN-10°-E前後、東西方向でN-80°-W前後の軸線をもって掘削されており、複数が重複している。したがって2条の溝がほぼ並行して検出されても、屈曲した位置では重複する場合が多く、道路遺構に伴う側溝としては確認できなかった。溝の幅は、約0.3m（18F区071SD）から約7m（18D区017SD）までの規模の違いがあり、規模に応じた区画の違いも推定される。また18F区077SDでは、溝と重複する位置で5ヶ所の柱穴と考えられる小土坑が確認できており（092SK、095SP～097SP、東壁断面において1基）、掘立柱建物の桁側柱穴列か柵の柱穴列の可能性がある。

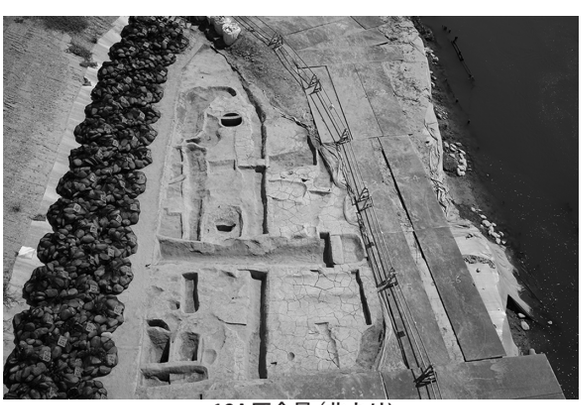
土坑（SK・SX）では、18D区017SDに重複する位置に貝殻と炭化物が入る土坑052SX、18F区091SDに重複する土坑073SKと075SK、18F区091SDに重複する090SK・093SKは長径1m前後の土坑で、戦国時代末の陶磁器が出土した。他に18F区087SX、18E区061SK、18A区037SKは、長径5m前後の大型の土坑であるが、出土遺物は少なかった。

出土遺物には、瀬戸・美濃窯産陶器の灰釉や鉄釉の壺・瓶類、天目茶碗、長石釉・灰釉の皿、擂鉢、磁器小皿と碗、土師器の鍋と皿、瓦などがあり、18E区060SDからは一括廃棄された陶磁器や土師器の鍋などが出土した。また18D区017SDと18A区041SDからは、陶磁器や土師器とともに、獣骨片や漆碗、曲物などが出土した。

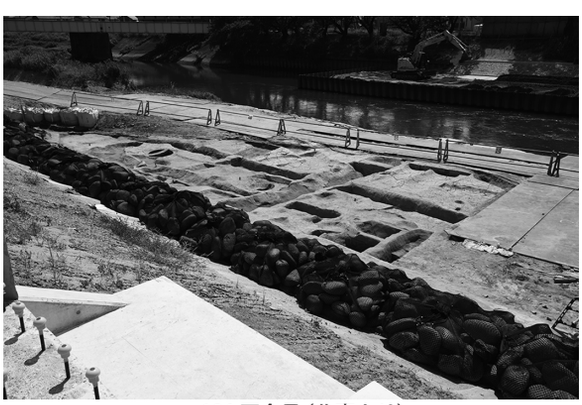
（２）江戸時代末～近代

旧五条川の流路を埋めたものと考えられる016SXを確認した。016SXは現在の五条川東護岸の東に埋没していた旧東護岸の石積みのさらに東にあり、18B区南西隅部から18D区西端部、18F区西端部にかけての範囲に検出できた。出土遺物は、江戸時代末から近代にかけての陶磁器、瓦、ガラス瓶などが多く出土した。

ま と め　清洲城下町遺跡は、これまでに多くの発掘調査が行われ、江戸時代の古城絵図などを参考に戦国時代のおおよその姿が復元されている。今回の調査地点は16世紀末～17世紀初頭における清洲城下町遺跡の中で、中堀と外堀の間にある町家推定域に当たる地点である。その一部を確認できたのみではあるが、戦国時代末から江戸時代前期にかけて営まれた区画溝や井戸、土坑を多数確認することができ、多くの遺構変遷が推定できた。（蔭山誠一）



18A区全景（北より）



18A区全景（北東より）



18A区北側遺構全景（東より）



18A区001SD断面（東より）



18A区035SE桶検出状況（北より）



18B区全景(西より)



18B区015SD(北より)



18B区022SE(北より)



18C区全景（北より）



18C区040SD・041SD（北東より）



18C区041SD出土曲物（南より）



18C区041SD出土漆製品（西より）



18C区041SD出土土師器皿（西より）



18D区全景（北より）



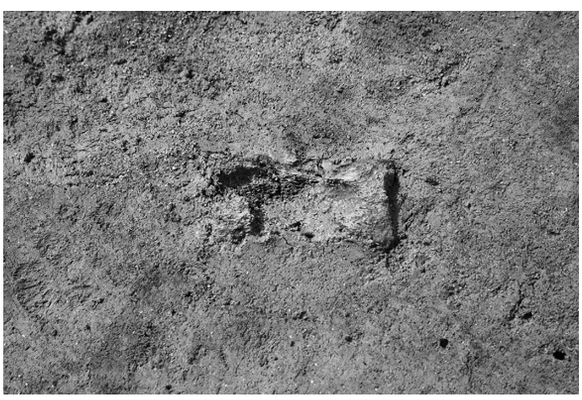
18D区全景（東より）



18区017SD（東より）



18D区052SX掘削状況（東より）



18D区017SD出土　獣骨（北より）



18E区全景（北より）



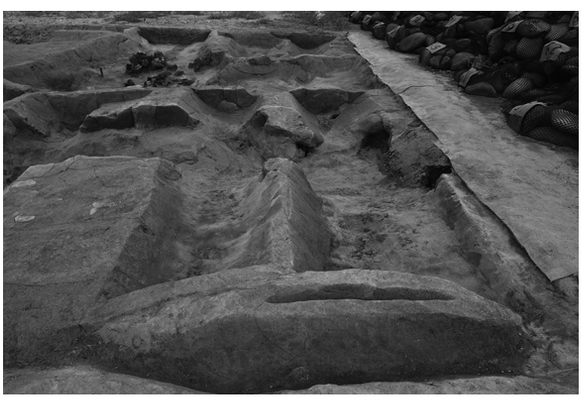
18E区全景（東より）



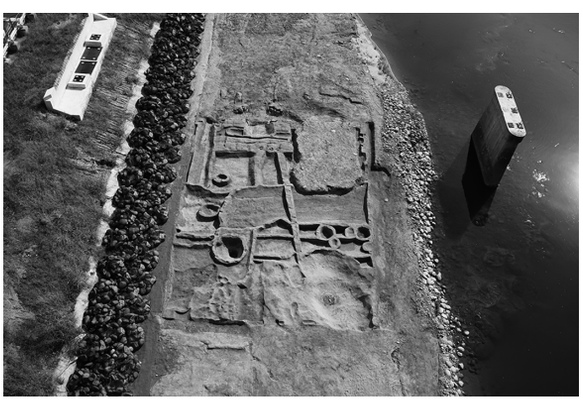
18E区061SK・063SD（北より）



18E区060SD遺物出土状況（南西より）



18E区032SD・064SD（南より）



18F区全景（北より）



18F区全景（東より）



18F区柱穴列（西より）
写真手前より078SD内の095SP・096SP・097SP・092SK

牛寺（ごでら）遺跡（本発掘調査B）

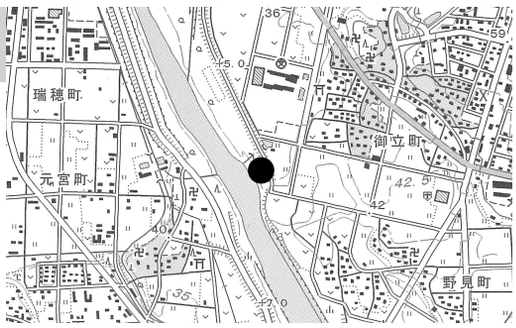
所在地　豊田市野見町一丁目地内
（北緯35度4分23秒　東経137度10分2218秒）

調査理由　矢作川河川改修

調査期間　平成30年12月～平成31年2月

調査面積　800㎡

担当者　酒井俊彦・鈴木恵介



調査地点（1/2.5万「豊田南」）

調査の経過　調査は国土交通省中部地方整備局豊橋河川事務所による矢作川河川改修に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成30年12月から平成31年2月にかけて実施した。過去の調査成果より、豊田市が昭和48年に実施した牛寺廃寺の調査地に隣接することから、古代寺院である牛寺廃寺に関連する遺構・遺物の出土も予想された。調査面積は800㎡である。

立地と環境　牛寺遺跡は、豊田市東山町付近から南西方向にのびる河岸段丘の先端付近に位置し、同じ河岸段丘上には南山畑遺跡、山の神古墳、市塚古墳など弥生時代から古墳時代の遺跡が連続する。また、豊田スタジアムを挟んで北側の河岸段丘上には高橋遺跡をはじめとする遺跡が多く存在する。調査対象地の現況は堤防内側の荒地であり、結果として近年の堤防の造成や周辺の道路整備等によって地形が大きく改変を受けていた。

調査の概要　調査は平成30年12月より開始した。調査区全体で想定以上に掘削深度が深く、排土処理を適切に行う必要上、調査区をA･B･C区に３分割し、調査区西側をA区、東側南半をB区、東側北半をC区(写真３)として調査を行った。

撹乱に含まれるものから、撹乱は昭和48年の豊田市による牛寺廃寺の調査後に受けたものと考えられる。

遺構　主な遺構は、溝（001SD、023SD）、掘立柱建物跡（024SB）がある。

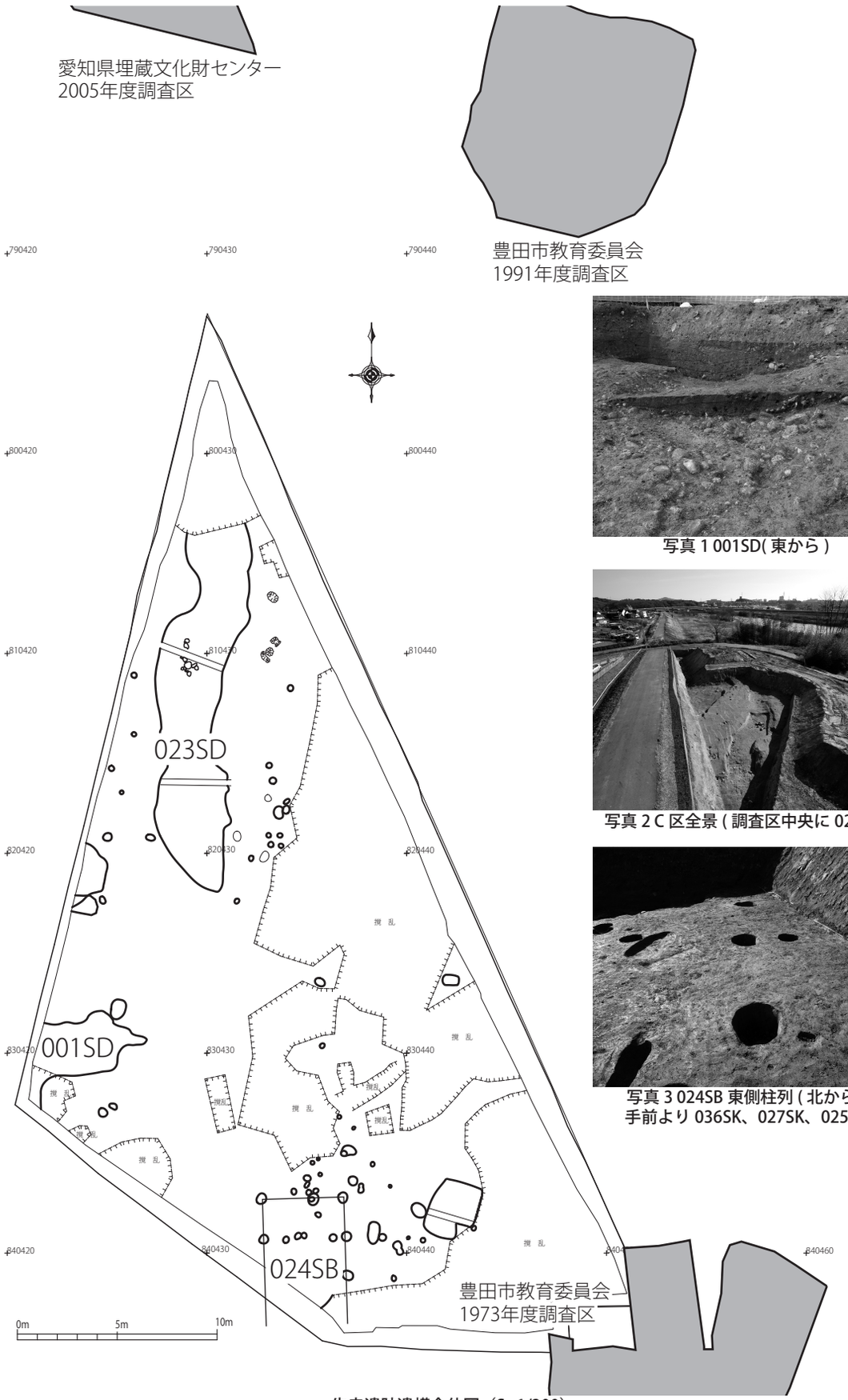
001SD(写真1)は調査区西端で一部を検出した、長さ5.4m、幅2.7mを測る。出土遺物には常滑窯系甕、擂鉢の破片が含まれるため、溝は中世後半以後に埋没したと考えられる。

023SD(写真2)は調査区北端から南方向に延び、調査区中央付近では検出できていないが西に向きを変えて001SDに連続していた可能性がある。また、愛知埋文2005年度調査区のSD01a･SD01bに連続する溝の可能性がある。出土遺物には近世の瓦片も包含する。

024SBは、A区014SK、015SK、B区025SK、027SK、036SKよりなる掘立柱建物跡である。柱間は桁行で約1.9m、梁間は4m。南へ続く可能性がある。昭和48年度の調査で検出された基壇状遺構の北西方向に十数メートルと近接し、015SKを除く４つの柱穴から、須恵器、瓦の破片が検出されていることから、牛寺廃寺に後続する時期に存在した可能性がある。

他の遺構の出土遺物には、中世陶器片（山茶碗）、瓦片、須恵器浄瓶頸部がある。

まとめ　本調査区では、古代から中世にいたる時期の遺構を確認した。また、堤防上の道路周辺がもっとも大きく撹乱を受けており、遺構面が削平されていた。堤防より離れるにしたがって撹乱は浅くなり、小土坑をはじめとする遺構は増加傾向にあった。将来的に調査が予定されている北側の隣接地域については、本調査区の断面で確認できる限り遺構面は残存していると想定される。（鈴木恵介）



牛寺遺跡遺構全体図（S=1/300）

写真 1 001SD(東から)

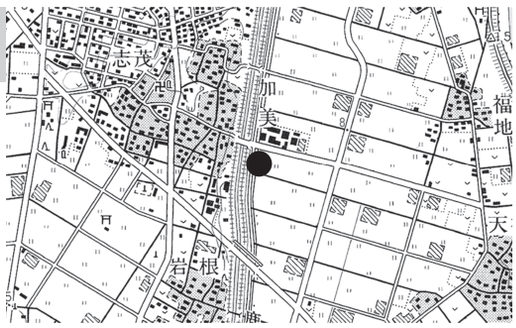
写真 2 C 区全景 (調査区中央に 023SD)

写真 3 024SB 東側柱列 (北から)
手前より 036SK、027SK、025SK

下懸（しもかけ）遺跡（本発掘調査B）

所在地　安城市小川町
（北緯34度54分25秒 東経137度5分43秒）

調査理由　中小河川改良工事
調査期間　平成 30 年 11 月～平成 31 年 2 月
調査面積　900 ㎡
担当者　酒井俊彦



調査地点（1/2.5万「西尾」）

調査の経過　調査は中小河川改良工事に伴い、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて当センターが委託を受けて調査を実施したものである。本遺跡は平成 12、21 年度、25 ～ 28 年度に鹿乗川導水路の東側と鹿乗川と導水路間の調査を行っている。今回を含めた総調査総面積は 9800 ㎡である。今年度は下懸橋の南側、鹿乗川と導水路間の調査を行った。

立地と環境　本遺跡は矢作川下流域、鹿乗川左岸の沖積地に立地する。鹿乗川は碧海台地東辺を南流し、川の西側の遺跡周辺は平坦な沖積地である。右岸の碧海台地上には姫小川古墳などの古墳群が展開し、平成 12 年より本センターが調査を行っている鹿乗川左岸には、北から南にかけて姫下、寄島、下懸、五反田、惣作の 5 遺跡が連続して所在する。中世以前の鹿乗川は矢作川沖積地を蛇行して走り、本遺跡及び姫下、惣作、寄島で東西方向の旧河道が確認されている。遺跡はこの旧鹿乗川の自然堤防上に展開し、標高は 5 ～ 6m を測る。これまでの調査では弥生時代、古墳時代前期、古代および中世の遺構、遺物が検出されている。また、調査区北側には北東から南西方向に流下する弥生時代以前の旧河道が確認され、古墳時代前半の土器と木製品が出土している。

調査の概要　今年度の調査区は平成 25 年度 B 区の北側、平成 26 年度 C 区の南側に隣接する部分である。調査は南北に長い調査範囲を北半を 18A 区、南半を 18B 区として調査区を設定し、上下 2 面の調査を行った。上面は近世～昭和期の耕作土層下の古墳時代包含層である黒褐色土層上面で遺構検出を行った。上面では A 区で北東から南西に走る幅約 2m、深さ 0.3m の中世溝 1 条を検出し、少量の山茶碗と常滑窯産甕が出土した。下面は包含層下位の暗灰色シルト層上面で遺構検出を行った。主な遺構として、古墳時代の竪穴建物、土坑、溝が検出された。竪穴建物は A 区下面で 3 棟検出され、いずれも遺存状況が悪く、床面近くまで削平されている。規模が判明するもので短軸約 2.8m 長軸 3m 以上を測り、他 2 棟は不明である。このうち 2 棟は床面上に炭化物層が確認された。また、A 区で長径 3m 以上の大形土坑を検出したが、大部分が調査区外となるため性格は不明である。出土遺物については、黒褐色土包含層中および撹乱土層から弥生時代後期土器、古墳時代土師器、古代土師器、灰釉陶器などが出土している。

ま と め　調査区の北から西側にかけて弥生時代以前の旧河道が存在し、今回の調査部分はこれに隣接する微高地に相当する。調査区北側と南側の調査では竪穴建物は無く、遺構は希薄である。今年度調査区では比較的多くの遺構が検出された。立地環境を踏まえて遺跡内の遺構分布、集落立地などについて検討することが課題である。　（酒井俊彦）



A区上面全景（西より）



A区下面全景（東より）



A区上面中世溝



A区下面遺構



A区下面竪穴建物遺物出土状況



A区下面竪穴建物完掘状況



A区下面遺物出土状況



調査区遠景（南より）

滝瀬（たきせ）遺跡（本発掘調査B）

所在地　北設楽郡設楽町八橋字タキセ
（北緯35度6分33秒 東経137度33分58秒）

調査理由　設楽ダム

調査期間　平成30年7月～平成31年1月

調査面積　6,900㎡

担当者　鈴木正貴・早野浩二・川添和暁



調査地点（1/2.5万「田口」）

調査の経過　発掘調査は設楽ダム建設事業に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所から愛知県教育委員会を通じた委託を受けて実施した。平成27・28年度に実施した県道10号以南の発掘調査においては、主として縄文時代早期・中期・後期の遺構と遺物が確認されている。平成30年度は、県道以北の丘陵斜面の上位に18A区（西半）と下位に18B区（東半）、16A区に隣接し、境川に面する段丘上に18C区を設定した。

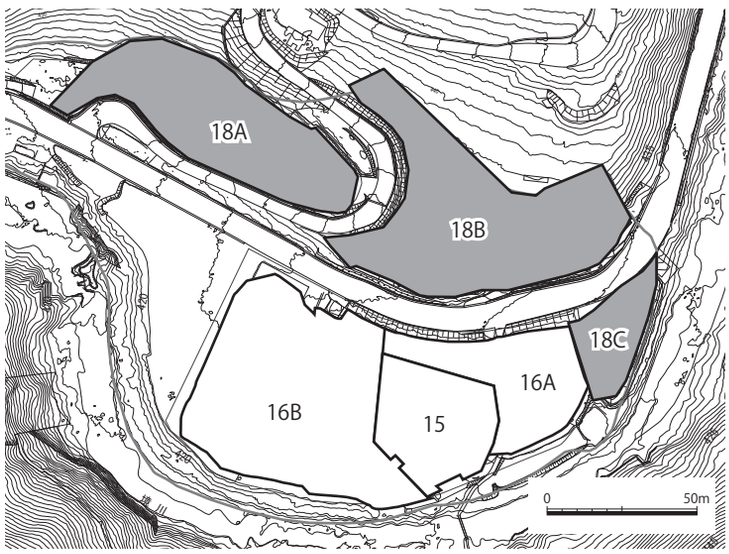


図1　調査区配置図（1:2500）

立地と環境　滝瀬遺跡は境川右岸の河岸段丘上から山麓の丘陵斜面に立地し、遺跡には江戸時代の伊那街道が通る。対岸の長江川右岸には縄文時代と平安時代の遺物散布地である八橋大平遺跡、滝瀬遺跡を臨む丘陵上の緩斜面には縄文時代の遺物散布地である長久保遺跡、境川に合流するタコウズ川左岸沿いの丘陵緩斜面には縄文時代の遺物散布地である根道外遺跡が分布する。

調査の概要　県道以北の丘陵斜面下位の18A区においては、主として平安時代の竪穴建物跡を含む遺構群、県道以北の丘陵斜面上位の18B区においては、主として縄文時代早期前葉以前（草創期末から早期初頭）の竪穴状遺構群、県道以南の段丘上の18C区においては、主として縄文時代後期から晩期の遺構群と近世以降の遺構群を検出した。　（早野浩二）

18A区　18A区は南西側にある谷地形に向かっての傾斜地形となっている。谷の堆積層は、表土・耕作土の下は近世末以降の黒色粘土層が2m以上にも渡って厚く堆積しており、その下には褐色粘土質シルト層、さらには巨礫混りの黄褐色砂質シルト層（地山）へと続く。

本調査区で遺構が展開していたのは、調査区北東側の緩斜面区域のみである。層序は、上からI層（耕作土あるいは盛土）・II層（小礫を含む黒色シルト層）・III層（灰褐色粘土質シルト層）・IV層（灰黄褐色粘土質シルト層）・V層（黄褐色粘土層あるいは巨礫混りの砂質シ

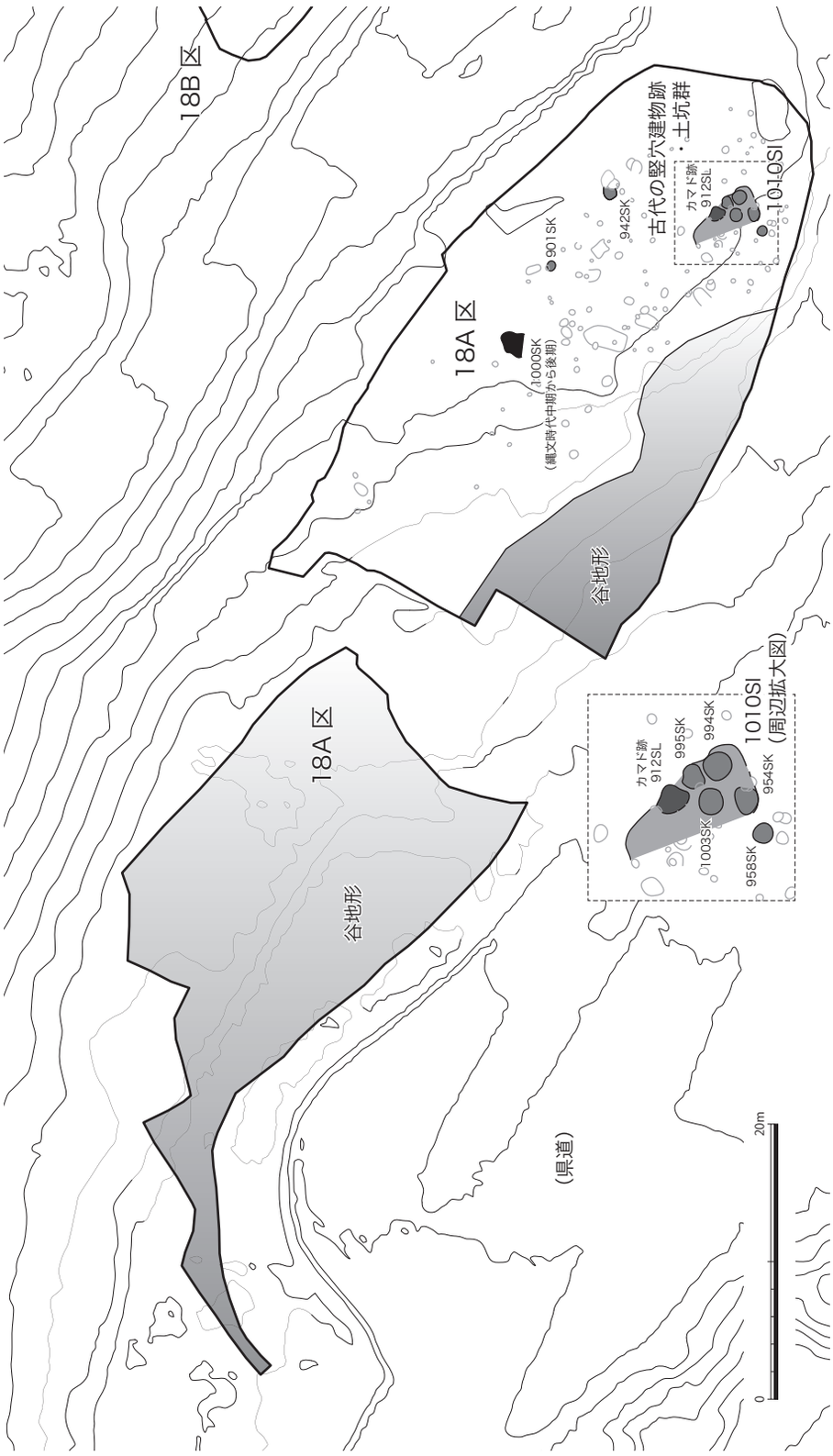


図２　18A区遺構配置図（S=1/500）

ルト層）の堆積が確認できた。このうち、II層は近世の遺物を含む包含層、III層は古代の遺構・遺物を含む包含層、IV層が縄文時代の早期以前と考えられる遺物包含層、V層が地山である。ここでは、IV層上面で古代の遺構群の展開を確認することができた。

古代の遺構には、カマドを伴う竪穴建物跡・土坑・ピットがある。竪穴建物跡（1010SI）は、緩斜面上方の北東端のみが辛うじて残存していた。中央にはカマド跡（912SL）があった。構造の残存状況は良好で、袖にした盛土部分や壁面に添わせた板石の構造などが観察された。西側板石はカマド土坑掘り方に密接しており、かつ下は地山に埋めこまれた状態で見つかった。一方、東側板石はカマド土坑掘り方との間に焼土を含む層が挟まっており、かつ掘り方底面より若干上位で検出されたことから、機能中に作り替えが行なわれた可能性がある。カマド底面および側面には被熱痕跡が認められた。その面とは別に、底面直上には焼土が10cm程度水平堆積しており、さらにその上面には板石が配されていた。配された板石の上から、灰釉陶器や土師器甕片がまとまって出土した。

径1m程度の土坑群が、この周辺から集中して見つかっている（954SK・955SK・958SK・994SK・954SK・1003SK・958SK）。1010SIとの前後の関係は不明であるが、955SK・994SKに関しては、1010SIより後で形成されたものである。これらの土坑からは炭化材由来の炭化物が多量に出土した。955SK・994SKでは断面形状が袋状を呈していた。これら土坑群から北に7mほど離れた、緩斜面上位で見つかった942SKも同様な遺構である。いずれも遺構からも、碗や段皿などの灰釉陶器片が出土した。また、901SKはこれらとは異なる小型の土坑であるが、灰釉小椀の出土を見た。

ピットは緩斜面に渡って広く検出されたものの、掘立柱建物跡あるいは列として確認できたものはなかった。埋土はIII層のみならずII層のもあることから、一部近世のものも含まれてる可能性がある。

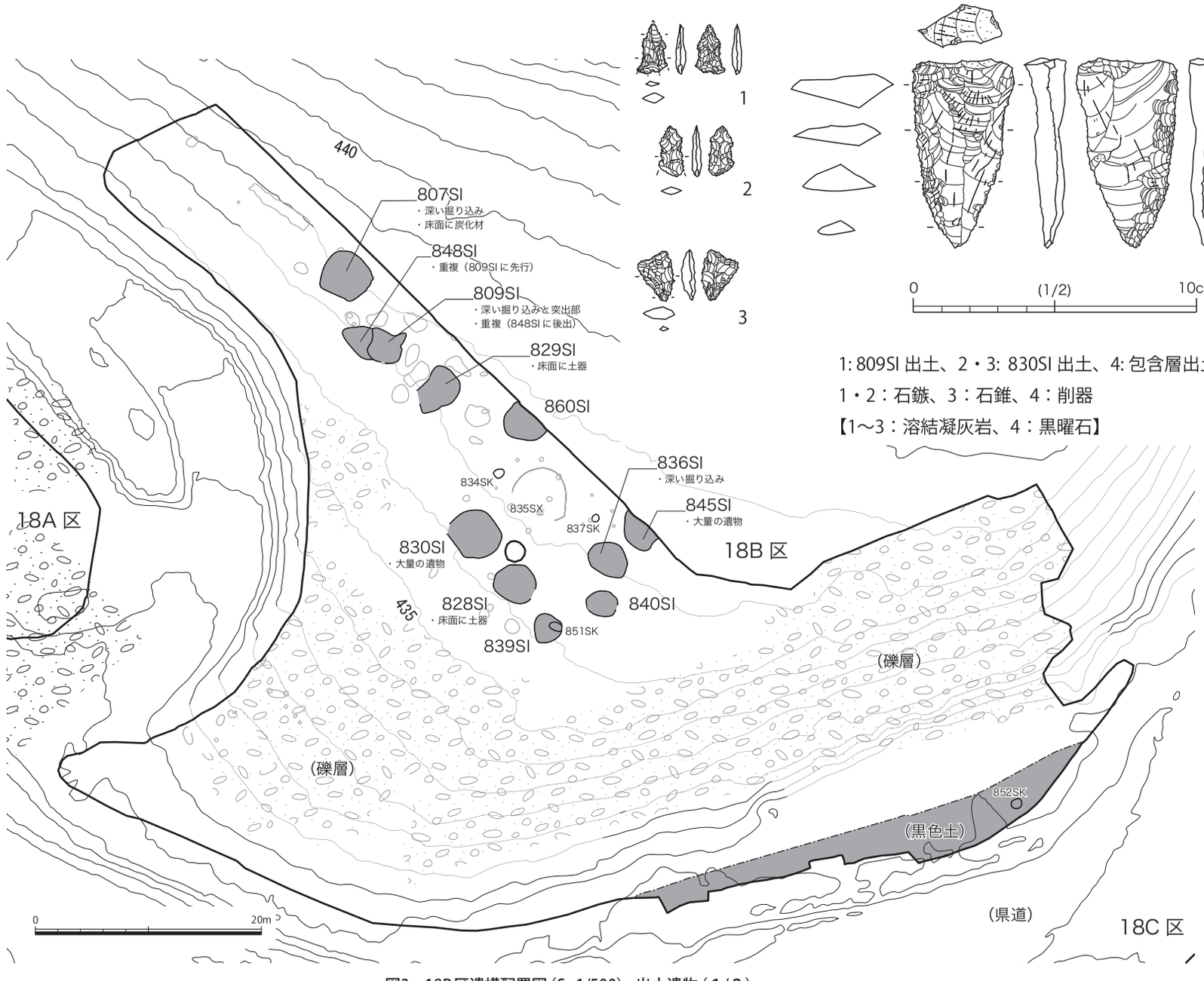
縄文時代の遺物が出土した遺構には、100SKがある。袋状土坑の可能性を考慮して調査を進めたものの、一方が浅くかつ一方が深い土坑の埋土状況や底面形状では、倒木痕を含めた別性格の落ち込みと考えられる。埋土内からは、縄文時代中期から後期の土器片や磨製石斧片が出土した。

IV層は、旧表土のような堆積層である。掘削したところ、緩斜面全体に渡って、礫器のほか、溶結凝灰岩や安山岩の剥片石核類が散在的に出土した。定型的な石器および土器の出土が認められなかったことから詳細な時期比定は難しいものの、縄文時代早期以前の所産である可能性が高い。

V層は、特に調査区北東側において、極めて均質な粘土層となっていた。調査時においても地下水の影響か、水分を多く含む堆積層であった。この均質な粘土は、調査後の深掘りによって、最大2m程度も堆積していることが確認された。（川添和暁）

18B区　18B区の主要な遺構として、丘陵上位の緩斜面において検出された縄文時代早期前葉以前（草創期末から縄文時代早期初頭）の竪穴状遺構（竪穴建物）、縄文時代早期の可能性が高い集石遺構、縄文時代後期初頭の土器敷き遺構等がある。その下位の丘陵斜面は巨礫を含む礫層が広範囲に露出し、遺構はほとんど検出されなかったが、南東端付近においては、16A区・18C区に連続すると思われる黒色土（遺物包含層）の堆積、集石遺構を確認した。

竪穴状遺構は11基を検出した。これらには相互に重複する竪穴状遺構（848SI・809SI）も含まれ、先後関係も判明している（848SIが先行し、809SIが後出する）。



1: 809SI 出土、2・3: 830SI 出土、4: 包含層出土

1・2：石鏃、3：石錐、4：削器

【1〜3：溶結凝灰岩、4：黒曜石】

図3　18B区遺構配置図（S=1/500）・出土遺物（1/2）

規模は長軸５mから６m程度の大型の部類に属する遺構（807SI・830SI）、長軸２mから３m程度の小型の部類に属する遺構（839SI・840SI）、長軸４m程度の中間的な遺構（848SI・809SI・829SI・860SI・828SI・836SI・845SI）がある。平面形は隅丸方形に近い形状（807SI・836SI）、円形に近い形状（809SI・860SI）、隅丸方形と円形の中間的な形状（830SI・828SI）、やや不整な方形（829SI・845SI）、不整な円形（848SI・839SI・840SI）がある。（竪穴状の）掘り込みは、丘陵側を竪穴状に著しく深く掘削する遺構（807SI・809SI・836SI・860SI？）、全体として掘り込みがやや深く、断面鉢状に掘削する遺構（830SI・845SI？）、掘り込みがやや浅く、緩やかな遺構（848SI・829SI・828SI・839SI・840SI）がある。

竪穴状遺構に付属する柱穴はやや明確さを欠くが、床面中央付近に１基または２基程度の柱穴様の小土坑が確認される遺構（807SI・848SI？・860SI・828SI？・845SI）、それらを含めて柱穴が確認されない遺構（829SI・830SI・839SI・840SI・836SI）がある。炉は確認されていないが、809SIにおいては、北東方向に突出する部分がわずかに被熱赤変し、周囲に炭化物も散在していた。

検出した竪穴状遺構の大半（848SI・809SI・829SI・830SI・828SI・836SI・845SI）からは、表裏縄文系土器、撚糸文系土器を主とする縄文時代早期前葉以前（草創期末から縄文時代早期初頭）の土器が出土している。なお、竪穴状遺構とその付近から明確な押型文系土器は出土していない。土器を含む遺物は覆土中からの出土が多いが、床面から良好な状態で土器が検出された遺構（829SI・828SI）もある。また、覆土中から石皿・台石類、磨石・敲石類、石鏃、石錐、剥片等の石器、礫が大量に出土した遺構（830SI・845SI）、竪穴建物（竪穴状遺構）の床面付近に炭化材が良好に遺存していた遺構（807SI）もある。後者について、放射性炭素年代測定をした結果（PLD-37115）、^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲で、9152-8807 cal BC (95.4%)を示した。なお、剥片石器の使用石材は溶結凝灰岩、安山岩が主体である。その他、同時期の特徴的な遺物として、包含層中から出土した黒曜石製の削器がある。

集石遺構は３基を検出した。851SKは長軸1.2m程度で、839SIと重複し、それに後出する。遺構には石皿・台石類、扁平な大型の石材が集積され、石材には被熱赤変したような部分も認められた。834SKは長軸0.9m程度で、拳程度の大きさの礫が集積され、被熱赤変した礫も多く含まれていた。集石遺構から土器は出土していないが、検出状況等から縄文時代早期に帰属する可能性が高いと考えられる。

縄文時代後期初頭の土器敷き遺構（837SK）は、破片化した深鉢約１個体分が検出された遺構で、土器は基盤層上に直接、敷かれた状態であった。（早野浩二）

１８Ｃ区　18C区は、16A区に隣接する、境川沿いの低位部分に位置する。調査区中央部分は後世の平坦面造成のために削平が著しかったものの、県道側と境川脇では、包含層の残存が良好であった。

層序は、調査区北の県道側では、上からI層（表土および盛土）・IIa層（礫混じり黒色粘土質シルト層）・III層（黒色粘土層）・IV層（灰黄褐色粘土質シルト層）・V層（黄褐色粘土質シルト層）である。この層序は16A区と同様で、IIa層は近世以降の堆積層、III層が縄文時代後期前葉の包含層、IV層が縄文時代早期の包含層、V層が地山である。IIa層からは旧伊那街道と思われる道路状遺構が見つかった。III層では後期前葉を中心とする遺物が出土し、IV層上面で、石皿の埋納された土坑（785SK）が見つかった。また、付近からは、内面に赤色顔料の残存する土器底部が見つかった。

今回の18C区では、境川に向かう調査区東端でも包含層の保存が良好であった。I層下か

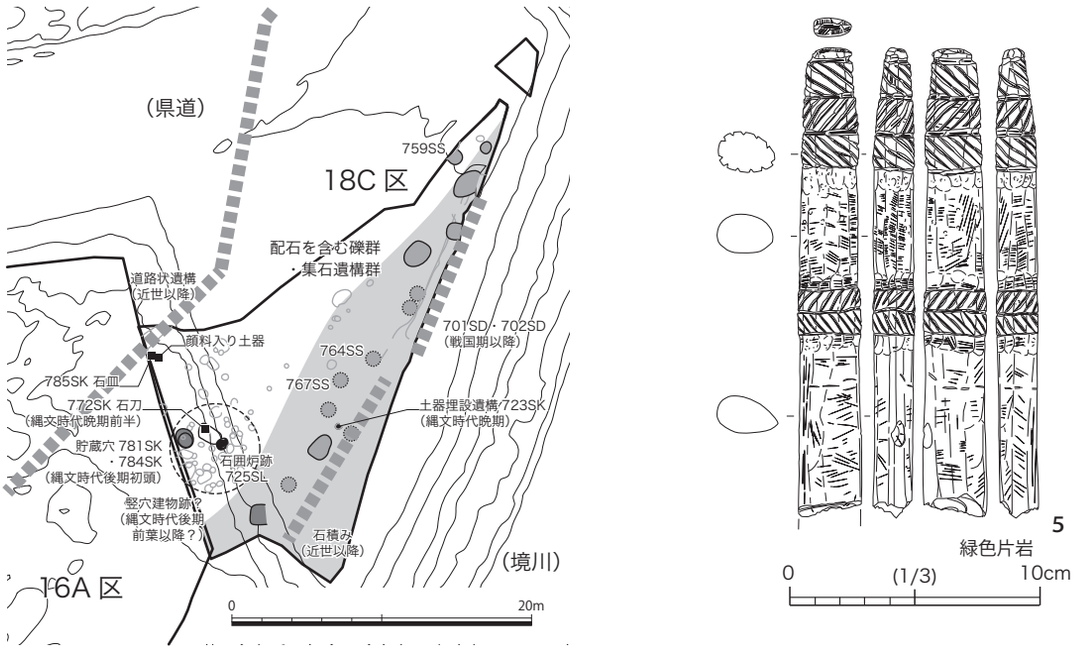


図４　18C区遺構配置図（S=1/500）・出土遺物（1/3）

らは、IIb層（黒褐色砂層）およびIII層に相当する灰褐色砂質シルト層が見つかった。IIb層は、細片化した灰釉陶器および山茶碗が含まれる層で、戦国期以降の層と想定される。調査区北東端で見つかった701SD・702SDは、このIIb層内で構築されている溝であり、特に701SDは両側に板状礫が配されていた。その下で確認された灰褐色砂質シルト層からは、土器片・石器がまとまって出土した。この層は形成途中に円礫が集石状に多く含まれており、一部には配石が確認された（764SS・767SS）。また、この層を掘り込んで縄文時代晩期に属する立位の土器埋設遺構（723SK）も見つかった。灰褐色砂質シルト層を掘削した下のV層直上では、落ち込み内で集石が複数個所でみつかった。明確に被熱痕が認められるものは限定的で、被熱痕の明瞭な759SSは集石炉跡であったと考えられる。

16A区に接する調査区西端中央では、IV層直上で、土坑・ピットがまとまって見つかった。725SLは石囲炉跡である。この炉跡は四方を板石で囲むものであるが、板石が二重になっている部分があった。精査した結果、この炉跡は二時期のものが重複していたことが明らかになった。また、この周囲を見ると725SLを中心にした径5m程度の範囲内にピットが検出されたことから、この範囲に竪穴建物跡があったことが想定できる。時期の詳細は不詳であるが、状況から縄文時代後期前葉以降に属すると考えられる。

725SL脇には、長軸1m程度の土坑（772SK）が検出された。埋土中位のレベルで炭化物粒を多く検出した土坑で、埋土には遺物はほとんど含まれないものの、底面では石刀・台石などが出土した。石刀は橿原文様が刻まれており、晩期前半に属する（5）。この遺構は土壙墓のようにもみえるが、底面は片側のみが深い形状となっており、性格は不明である。

また、772SKの脇には、径1mを越える大型の土坑が検出されている。掘削・埋納を繰り返された土坑で、本来は貯蔵穴であったと考えられる。上部を781SK・下部を784SKとし調査したところ、781SKの底面で、板石が複数枚敷かれた状態で見つかった。両遺構とも多量の土器片が出土したが、板石下の784SKでは、多量の深鉢片が敷かれたように配されていた。781SK・784SKの出土遺物は、ともに縄文時代後期初頭が主体である。（川添和暁）



滝瀬遺跡全景



18A区全景（東半）



18A区全景（西半）



18A区古代のカマド跡912SL土層断面



18A区古代の土坑942SK出土灰釉陶器



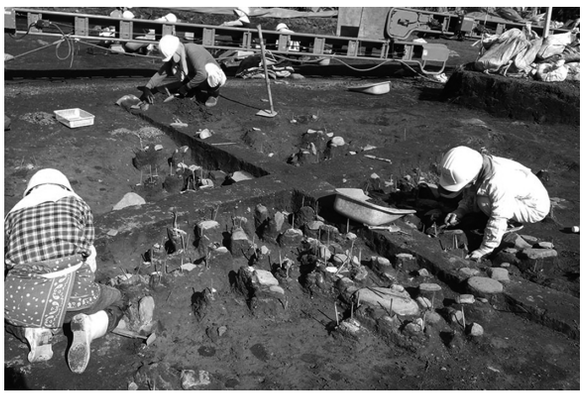
18B区全景



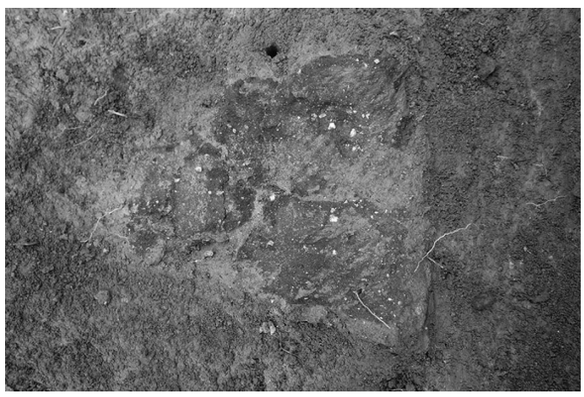
18C区全景



18B区重複する竪穴状遺構848SI・809SI



18B区竪穴状遺構830SI遺物検出状況



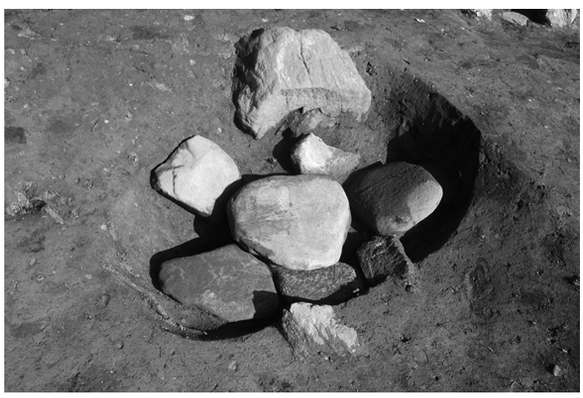
18B区竪穴状遺構829SI床面出土縄文土器



18B区竪穴状遺構845SI



18B区竪穴状遺構860SI



18B区集石遺構851SK



18B区集石遺構834SK



18B区土器敷き遺構837SK



18C区遺物包含層内集石・礫群出土状況



18C区集石遺構759SS



18C区配石遺構764SS



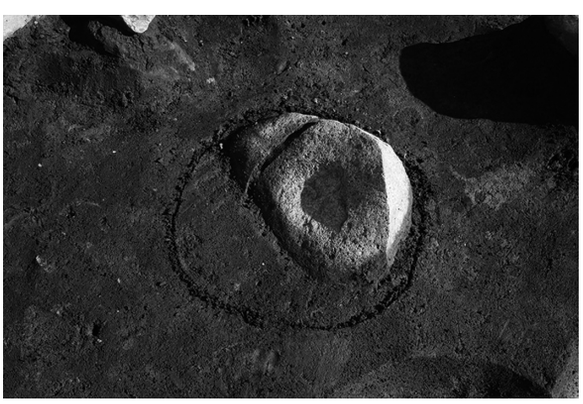
18C区貯蔵穴784SK内石組み下土器出土状況



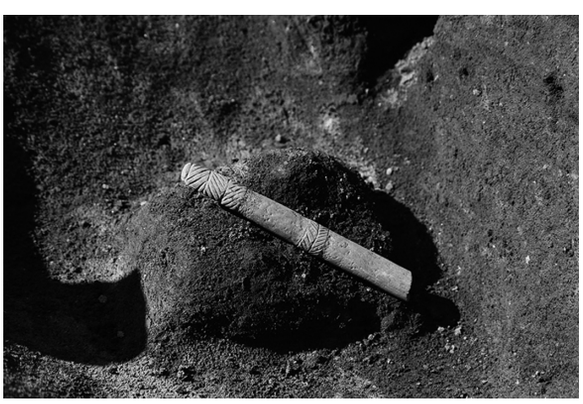
18C区石囲炉跡725SL



18C区石囲炉跡725SL周辺ピットなど



18C区石皿出土状況



18C区土坑772SK内石刀

石原（いしはら）遺跡（本発掘調査B）

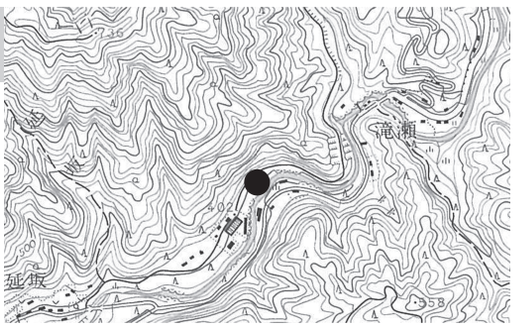
所在地　北設楽郡設楽町川向地内
（北緯35度6分55秒 東経137度34分22秒）

調査理由　設楽ダム

調査期間　平成30年5月～平成30年12月

調査面積　7,050㎡

担当者　鈴木正貴・永井邦仁・田中　良



調査地点（1/2.5万「田口」）

調査の経過　発掘調査は、設楽ダムの建設工事に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。

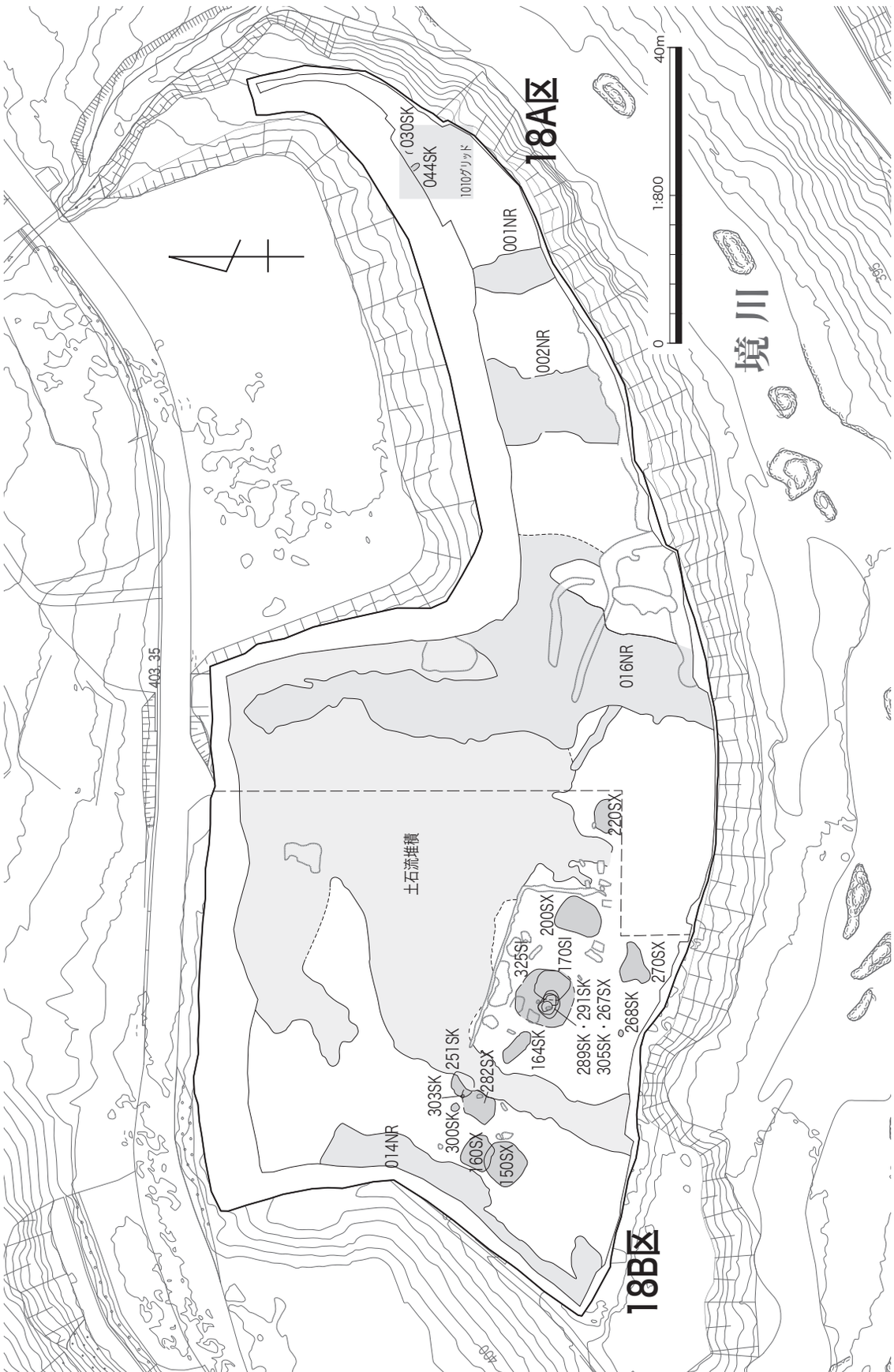
立地と環境　石原遺跡は、豊川上流の境川右岸に所在する（川向地区）。石原遺跡とその周辺では、主に境川右岸に発達した河岸段丘および沖積地からなる平坦面や緩斜面が分布しており、やや開けた谷地形となっている。このうち最上流の左岸に所在するマサノ沢遺跡では、平成29年度の発掘調査でハート形土偶が出土している。石原遺跡は、隣接する下延坂遺跡とともにマサノ沢遺跡の対岸に位置し、その範囲は、標高394～403mの緩斜面を中心に一部は北側の斜面（標高405～418m）にも及んでいる。これらの遺跡は、平成28年度に当センターによって範囲確認調査が行われている。

調査の概要　今年度発掘調査が行われた緩斜面は、地表面下約3mで片麻岩の岩盤となっている。その上層には、①角・円礫が多く混じる砂礫層の範囲と、②礫の少ない砂層の範囲とがある。前者は主に上流側に分布し、後者は下流側に分布する。特に縄文時代中期前半の竪穴建物跡などの遺構が集中して検出されたのは②の砂層頂部であるが、当該層は現河道に沿って発達した自然堤防とみられる。一方、当該地点から北側の斜面へ続く一帯は、砂層の上位に③長径15～50cmの角礫を多く含む粗粒砂が堆積している。当該層中には縄文土器や石器だけでなく、一部に近世後半の陶磁器類も含まれることから、縄文時代から近世後半までの間に複数回発生したとみられる土石流堆積に起因するものと考えられる。

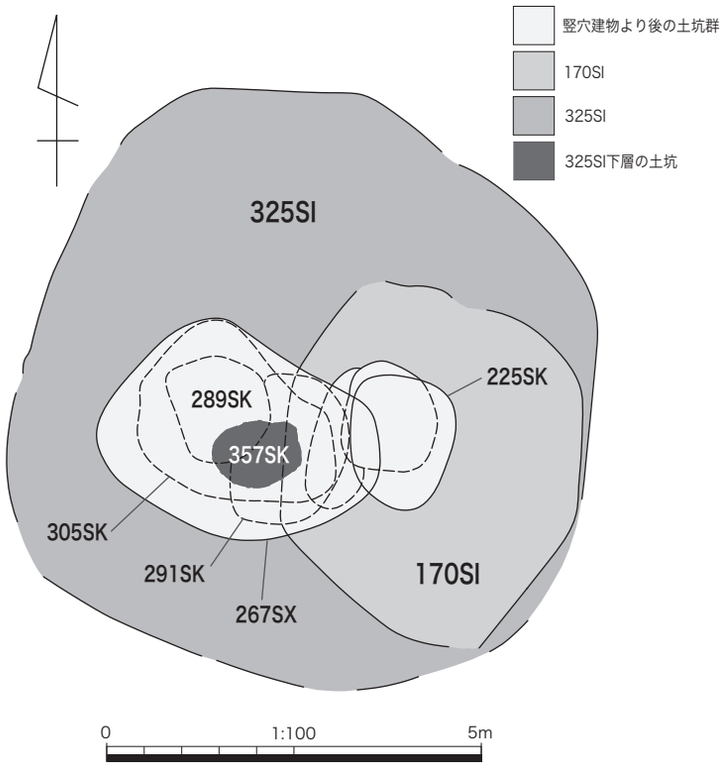
以上のように石原遺跡では大別して3種類の砂層がみられた。調査では、これに対応してA区南東部で①砂礫層、A区北西部およびB区北半部では③土石流堆積層、B区南半部では②砂層の各上面において遺構検出を行った。なお土石流は本来あった遺構面を破壊しているが、その端部では若干の下層遺構を検出することができた。（永井邦仁）

A区　A区東端で、現代の造成土の下から暗褐色土の間層をもつ上下２層のシルト質の黒色砂層が検出された。このうち、上部黒色砂層からは、近世の陶磁器片や縄文土器片、剥片などが出土した。一方、下部黒色砂層の上面では土坑などの遺構を 20 基以上検出した。土坑内や下部黒色砂層中から、後期や晩期の土器片が出土しているため、遺構も当該期の可能性がある。特に 1010 グリットでは、遺構や遺物が良好な状態で検出された。

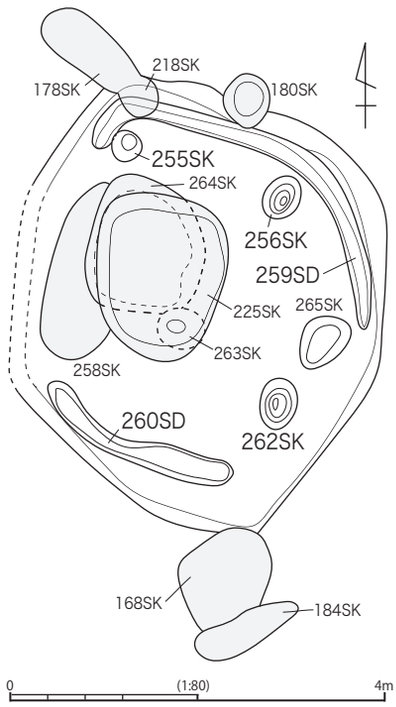
030SK　030SK は、下部黒色砂層上面から掘り込まれた土坑で、凝灰岩の剥片や石核が約 30 点出土した。これらの一部は接合関係にあることから、石器製作に関わる廃棄または埋納の可能性が高い。この土坑からは土器が出土していないため明確な時期は不明だが、周辺で出土している土器は縄文時代後期以降のものがほとんどであることから、この土坑も後期以降の可能性がある。


18A区
18B区
境川
土石流堆積
030SK
044SK
001NR
002NR
016NR
014NR
220SX
200SX
325SK
170SI
291SK
289SK・305SK・267SX
268SK
270SX
164SK
251SK
282SX
303SK
300SK
160SX
150SX
403.35
0
1:800
40m

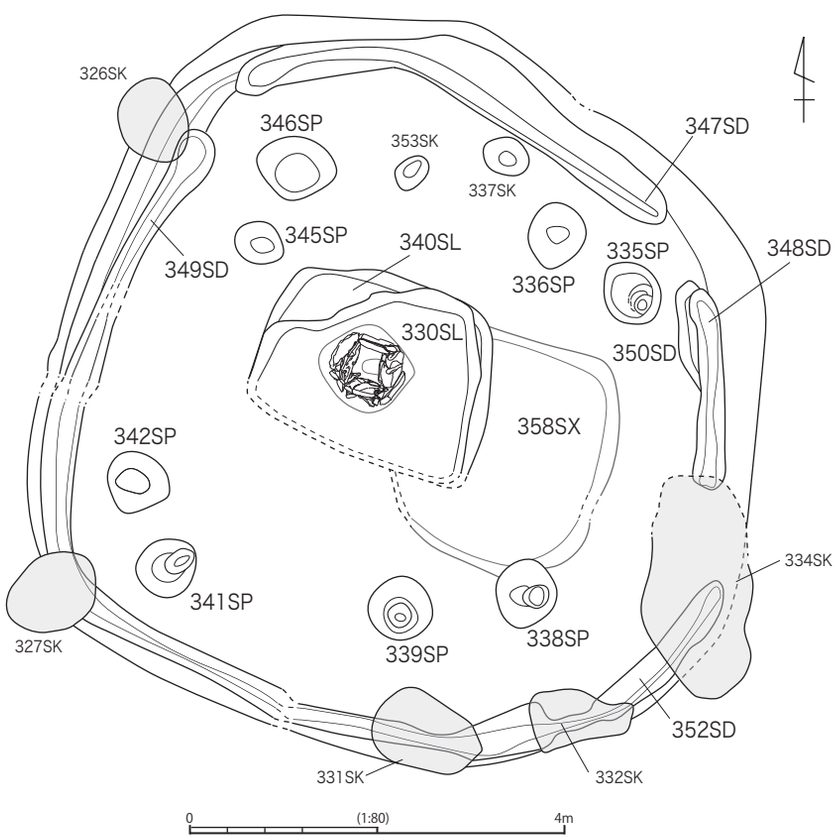
遺構全体図（S=1/800）



竪穴建物跡170SI・325SIと各土坑群の重複関係



竪穴建物跡170SI



竪穴建物跡325SI

044SK　044SK は下部黒色砂層上面から掘り込まれた土坑で、縄文土器の口縁部が出土している。土器は土坑の検出面付近だけで出土している。土器の時期は縄文時代晩期である。

自然流路
016NR　016NR は幅 4 ～ 28m、全長 64m 以上の自然流路である。先述のように石原遺跡では広範囲にわたる土石流堆積があるが、016NR はその上面で検出されていることから、その最終段階と考えられる。016NR は、途中で屈曲や合流点を交えながら 18A 区西部を南北方向に横切っている。堆積層は直径 20cm 以上の角礫を多量に含む粗粒砂が主体で、土石流もしくは収束後の沢の様相を示している。その起点は、地形から類推すると遺跡北東部の緩斜面が考えられる。016NR からは黒曜石製の石鏃や塩基性岩製の磨製石斧などが出土しているが、いずれも摩滅や擦痕がみられるので、より上位の地点から流されてきた可能性が高い。

B　区　B 区の北半部では、土石流堆積の上面で若干の土坑や溝状遺構が検出され、縄文土器小片などが出土している。一方､南半部では先述のように細粒砂主体の河川堆積が広がる。このうち川近くは耕作などにより削平されていたが、中期の縄文土器が出土する土坑 268SK など若干の遺構がある。その北側の一帯では、竪穴建物跡 2 基（170SI・325SI）をはじめとする大小の土坑群が検出されている。170SI は 325SI の埋土に構築されたもので、さらにその埋土を掘り込む土坑群 (289SK、291SK など) があり著しい重複をみせている。

150SX　150SX は直径約 5m、深さ 30cm の浅い窪地地形を呈する。検出時に遺物が多量に出土したが、下部では遺物がほとんど出土していない。これは、浅い窪地地形に遺物が二次堆積したためと考えられる。縄文土器の時期は縄文時代中期前半である。

170SI　170SI は直径約 3.8m の竪穴建物跡である。平面形はやや不整円形を呈し、壁溝を伴っている。検出面からの深さは最大で約 0.2m と浅く、埋土の上から掘り込まれた土坑群 (225SK など) は床面を一部抉りこんでいる。そのため検出された柱穴は 3 基にとどまる。床面からは若干の炭化物が出土しているが炉跡は検出されなかった。出土遺物は早期後半の 1 点を含む少量の縄文土器や黒曜石の剥片などが出土している。出土土器から縄文時代中期前半と考えられる。

251SK　251SK からは、縄文時代中期前半の土器と溶結凝灰岩製のスクレイパーや石錐、剥片、磨石などが出土している。出土石器の一部に黒曜石が含まれているが、大半は溶結凝灰岩である。この時期の確実な共伴事例として注目される。

289SK　289SK からは、縄文時代中期前半の土器や黒曜石製の石鏃、剥片などがまとまって 20 点ほど出土したほか、炭化物も多く含まれていた。また、拳大以上の亜円礫や円礫が一定の高さでまとまって出土している。

291SK　291SK は 289SK に隣接する土坑で一部が切られる。こちらも 289SK と同様に縄文時代中期前半の土器や石器が出土する。289SK よりも黒曜石の剥片などが多く出土している。

300SK　300SK は縄文土器片が約 0.2m 四方の範囲でまとまって出土した土坑である。土器片は同一個体と考えられるが、口縁部付近に限られており、全体の復元には至っていない。時期は縄文時代中期前半である。土器だけでなく、剥片も出土している。

303SK　303SK は 300SK と同じく縄文土器がまとまって出土した土坑である。大きな土器片の下にも土器片が重なっている。おそらく横位で置かれた土器が土圧などで押しつぶされ、土器片が約 0.15m の範囲からまとまって出土したとみられる。

325SI　325SI は直径約 7.8m の竪穴建物跡である。平面形は隅丸方形に近い円形を呈する。重複関係にある 170SI の下位にあり、部分的に間層が認められる。残存状況が良好で、検出面からの深さは最大で約 1m である。床面には幅約 0.2m の壁溝がめぐり、柱穴とみられる 8 基以上の土坑が検出されている。柱穴の一部には抜き取り痕も認められる。また中央には石囲炉がある。石囲炉は、まず床面に一辺約 2.4m の方形の掘り方をもつ 1 時期目の 340SL が構築される。その後、敷設された 4 つの棒状もしくは板状の礫の一部を据え直すとともに、その内側に礫を追加して 2 時期目の 330SL が構築される。いずれも埋土に炭化物や焼土を多く含むが灰はみられなかった。以上のように石囲炉の改作が行われていることから、主柱穴もそれに対応して抜き取られていると考えられ、建て替えがあったと想定される。

ただし出土遺物は遺構の規模に対して少なく、若干の縄文土器や黒曜石の剥片が出土している。遺構の時期は出土土器から縄文時代中期前半と推測される。

まとめ　石原遺跡では A 区と B 区で異なる時期の遺構や遺物が検出された。A 区では縄文時代後期と晩期、B 区では縄文時代中期前半が主体である。また、石器石材についても大きく様相が異なる。A 区では凝灰岩や安山岩が主体であるのに対し、B 区では溶結凝灰岩と凝灰岩が主体となっている。このことは、縄文時代の石材利用の変遷について考える上で、重要な事例となるであろう。

A 区は、竪穴建物跡は検出できなかったが、約 20 基の土坑や遺物を含む自然流路が検出された。なかでも、030SK のように石器製作に関わる残滓が確認できたことは、周辺での活動を類推させる。また、その活動域が北側の緩斜面地に展開する可能性を、1010 グリットで検出された土坑や自然流路に含まれる遺物が示唆している。

B 区では、325SI の下層に黒色砂礫層がある。旧河道に伴う洪水性堆積により一部しか残存していなかったが、この層からも中期前半の土器や石器が出土する。ここで、325SI に関わる遺構の前後関係を整理してみると、黒色砂礫層 → 325SI → 170SI → 291SK → 289SK となる。興味深いことに、このいずれの層からも縄文時代中期前半の土器が出土している。しかも、325SI と 170SI の間に約 3cm の粗粒砂層が間層として入っている。このことから 325SI が洪水等で埋没し、同一地点において復旧して 170SI を構築した可能性がある。このことは、住居が埋没しても再度同じ場所で生活をするということが繰り返し行われていたことを示唆する。

今回の調査では、東海地方でも珍しい縄文時代中期前半の竪穴建物跡などの遺構や遺物が出土した事例となった。また、縄文時代の石材利用の画期が中期にある可能性を今回の調査で見通すこともできた。

今後の課題として、整理作業等を通じて、B 区の重複する遺構間における時期差やそこに含まれる遺物の差異を検討し、重複する竪穴建物跡どうしだけでなくそれより西側の 251SK や 300SK・303SK とどのように関係していたのかを考えていく必要がある。

（田中　良）



石原遺跡遠景(西から、B区調査時)



030SK遺物出土状況（南から）



044SK遺物出土状況（南西から）



016NR完掘状況（南から）



150SX検出状況（南から）



170SI完掘状況（南東から）



251SK遺物出土状況（南から）



289SK遺物出土状況（南から）



291SK土層断面と遺物出土状況（南から）



300SK検出状況（南から）



303SK土器出土状況（西から）



325SI完掘状況（南西から）



330SL（南西から）

ハラビ（たいら）平遺跡（本発掘調査A）

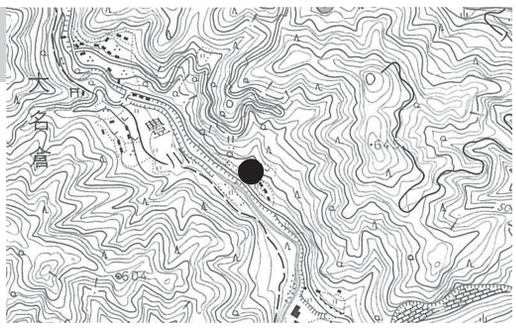
所在地　北設楽郡設楽町大名倉地内
（北緯35度6分25秒 東経137度33分1秒）

調査理由　設楽ダム

調査期間　平成30年12月

調査面積　10㎡

担当者　鈴木正貴・永井邦仁・田中　良



調査地点（1/2.5万「田口」）

調査の経過　発掘調査は、設楽ダムの建設工事に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。

立地と環境　ハラビ平遺跡は、大名倉地区の豊川上流左岸に位置する。遺跡は南西方向へひらけた上下2段の緩斜面に立地する。明治時代の地籍図によれば遺跡所在地の字名は「蕨平」で、遺跡名はこれが転訛したものと考えられる。また『北設楽郡史 原始～中世』（同編纂委員会1968）には「ワラビ平遺跡」として石斧や石鏃の出土があり縄文時代中期とされている。当センターでは、平成27年度に県道33号瀬戸設楽線付近の下位緩斜面（標高429～440m）で範囲確認調査を行い、谷地形と縄文土器を検出している。

調査の概要　今回は、上位の緩斜面（標高452～464m）が対象地となった。当該地点は現状で山林となっているが、以前は果樹園および水田として利用されていた。ここに5か所のトレンチ（TTと呼称、規模は1m×2m）を設定し、地山（風化した片麻岩を含む黄褐色粘土層上面）まで掘り下げて、土層の確認と遺構や遺物の検出を行った。

最西端のTT01からTT04までは、地表面下0.1～0.4mの厚さで黒褐色粘質土が堆積し、その下で地山が確認されている。したがってこれらのトレンチの地点は尾根筋に相当していると考えられる。このうちTT03では地山面上で小土坑2基が検出されている。一方TT05では、地表面より約1.5m下の地山まで角礫の少ない黒褐色土が厚く堆積している。このことから、当該地点では谷地形を埋めて水田としていることが明らかになった。谷地形はTT01～04の尾根筋とTT05東側の尾根筋との間にあり、地山面で比較すると高低差約1.7mの凹地である。なお、黒褐色土層からは遺物が出土していないので堆積時期を明らかにすることは難しいが、礫の混入が少ないことから土石流の可能性は低いと考えられる。

出土遺物　出土遺物は、TT02・03で石器剥片（凝灰岩・黒曜石）と灰釉陶器碗の小片が出土している。さらにTT03では山茶碗類小碗、瀬戸・美濃窯産陶器（擂鉢など）、縄文土器が出土している。TT04では近世の瀬戸・美濃窯産陶器碗が出土している。

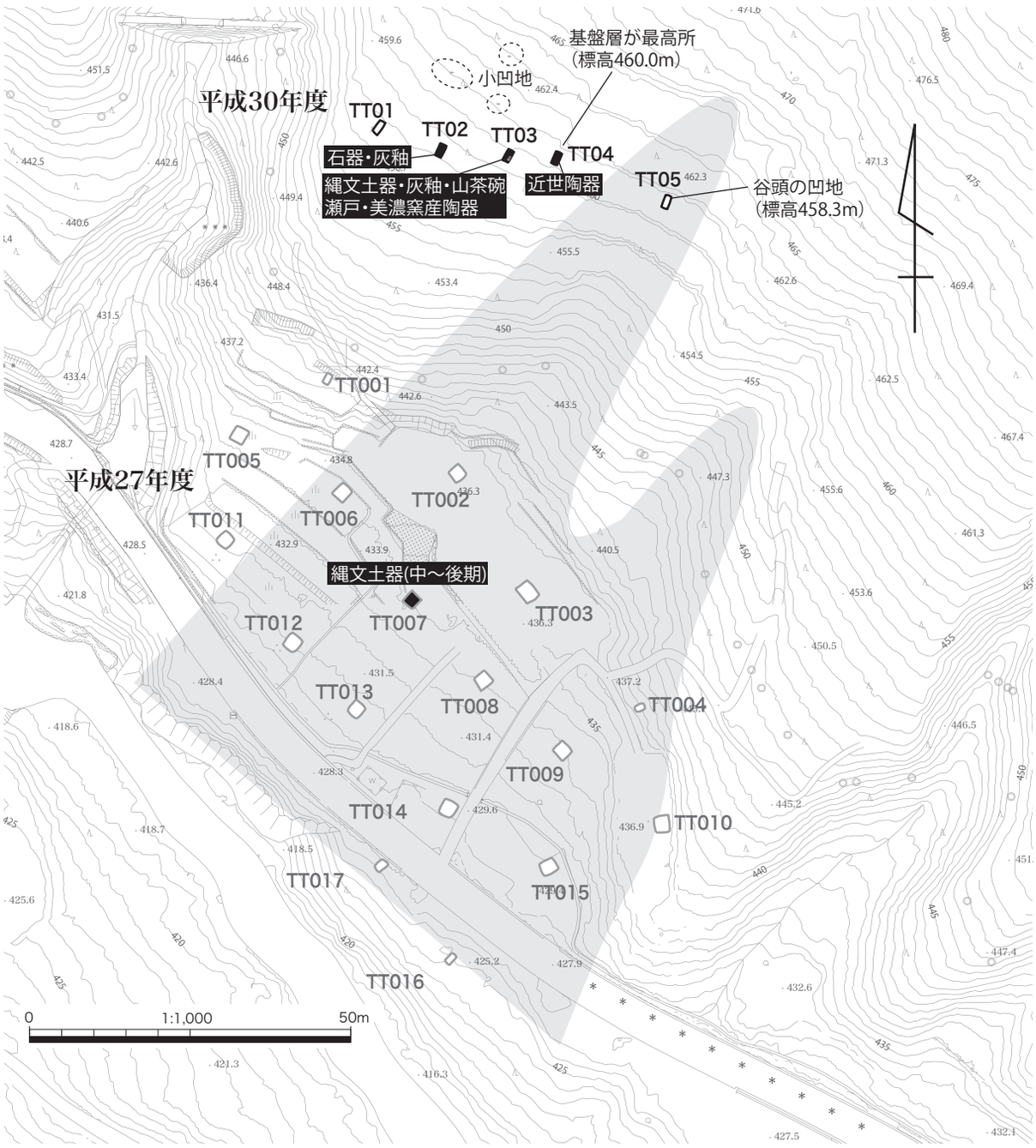
ま と め　以上の調査結果から、上位の緩斜面では縄文時代と平安時代～戦国時代を中心とする土地利用があったことが想定される。また、地表面において直径約5mの凹地が数か所でみられる点も注意を要する。なお平成27年度の範囲確認調査では、下位の緩斜面の大半が谷地形（谷１・2）であることが想定されている。谷1はTT05付近に想定される谷地形の下方延長と考えられるが、谷1では土石流堆積とその中で縄文土器片が検出されているので、層位の連続性は認めがたい。　（永井邦仁）



調査風景（TT03付近、東から）



出土遺物（TT03）



調査の概要（S=1/1000）

中村（なかむら）遺跡（本発掘調査A）

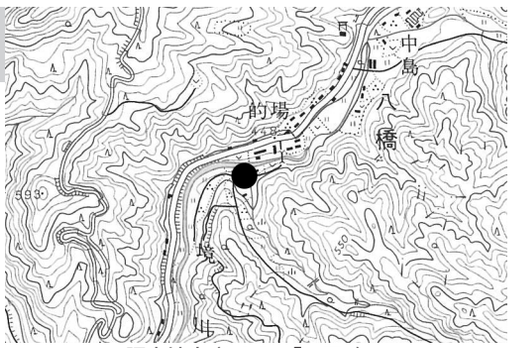
所在地　北設楽郡設楽町八橋字道上
（北緯35度7分41秒　東経137度35分16秒）

調査理由　設楽ダム

調査期間　平成30年12月

調査面積　20㎡

担当者　鈴木正貴・永井邦仁・田中　良



調査地点（1/2.5万「田口」）

調査の経過　発掘調査は、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所による設楽ダム工事関連の事前調査として、国土交通省から愛知県教育委員会を通じて、当センターが委託を受けて実施した。調査は、1m×2mのテストトレンチを6ヵ所と2m×2mのテストトレンンチを2ヵ所の合計8ヵ所を設定して行った。

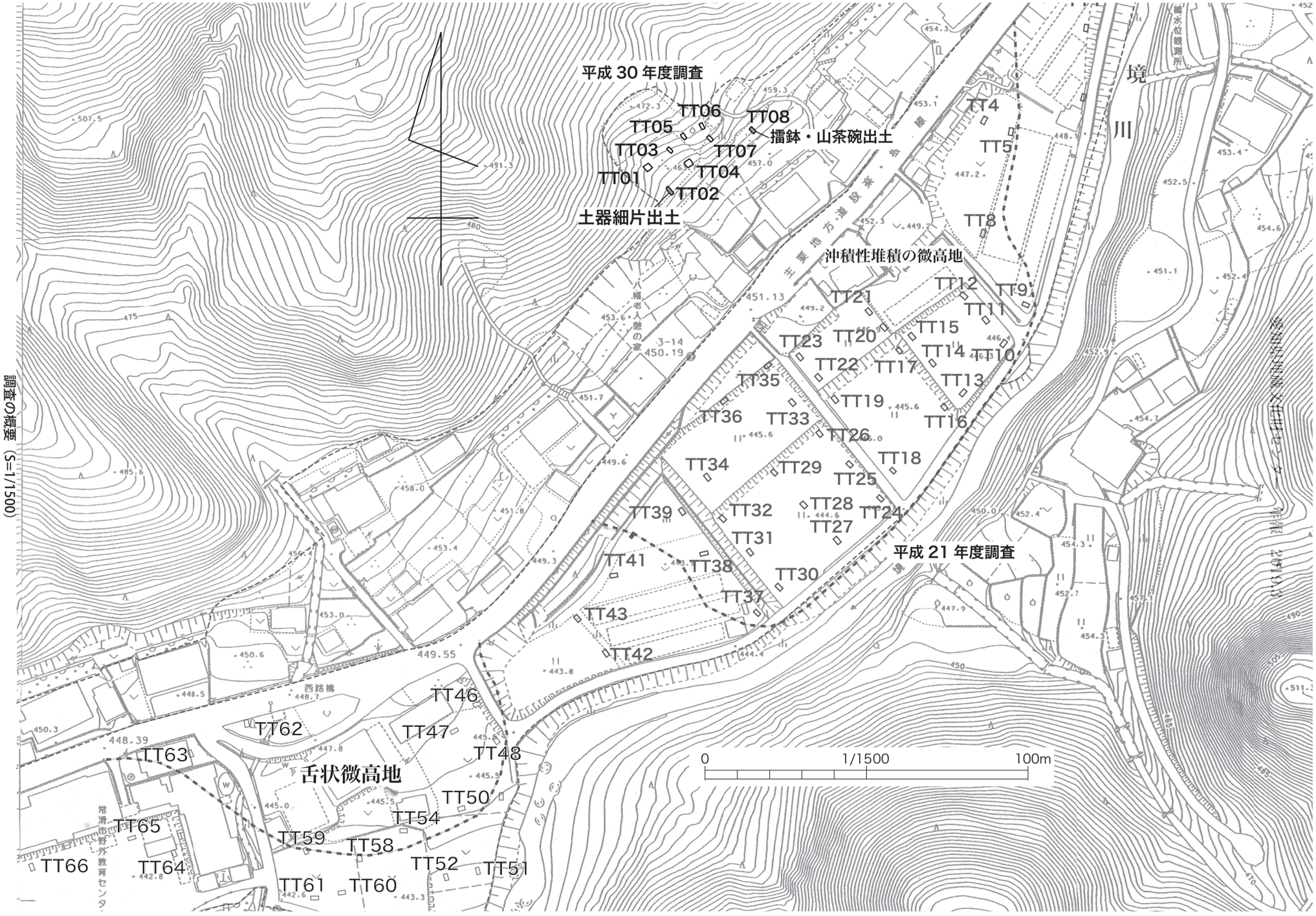
立地と環境　遺跡は、豊川支流の境川上流右岸に所在する（八橋地区）。境川がつくる幅約150mの谷地形の北縁を北東から南西方向に伊那街道が延びており、その沿道に八橋地区の集落が展開する環境にある。街道は標高449～452mにあり、遺跡はそれを境として北西側の斜面地（標高457～472m）と南東側の平坦面（標高445～452m）に立地する。愛知県埋蔵文化財センターが平成21年度に実施した調査では、南東側の平坦面から平安時代から江戸時代までの遺物が出土している。

調査の概要　今回の調査は、北西側の斜面地でおこなった。TT01～TT04では、基盤層まで約2mと深く、TT02で摩滅した土器細片が出土したが、遺構は検出されず、耕作等に伴う撹乱が確認された。TT05とTT06では約30cmほどで基盤層に達したが、遺構や遺物は検出されなかった。TT07とTT08は平場に近い状態で、TT08からは中世の山茶碗や戦国時代の擂鉢が出土したが、基盤層直上に鉄製のアンカーが埋め込まれていた。

ま と め　以上の結果、当該地点では遺構や遺物包含層が検出されず、遺物も撹乱の影響を受けていることを確認した。耕作地造成による改変を受けており、遺跡が残存していない可能性が高い。（田中　良）


完掘状況（TT08）


TT08の出土遺物（山茶碗（上）、擂鉢（下））


平成 30 年度調査
TT01
TT02
TT03
TT04
TT05
TT06
TT07
TT08
擂鉢・山茶碗出土
土器細片出土
TT4
TT5
TT8
TT9
TT10
TT11
TT12
TT13
TT14
TT15
TT16
TT17
TT18
TT19
TT20
TT21
TT22
TT23
TT24
TT25
TT26
TT27
TT28
TT29
TT30
TT31
TT32
TT33
TT34
TT35
TT36
TT37
TT38
TT39
TT41
TT42
TT43
TT46
TT47
TT48
TT50
TT51
TT52
TT54
TT58
TT59
TT60
TT61
TT62
TT63
TT64
TT65
TT66
沖積性堆積の微高地
舌状微高地
平成 21 年度調査
境
川
0
1/1500
100m